

古墳時代甲冑の系統と授受

川畑 純

【要約】 古墳時代の主要な武具である短甲・頸甲・冑について、生産時の系統差に基づいて組み合わせの変遷と分布を検討し、その社会的意義の一端を論じた。鉄製甲冑の導入当初は生産と流通は独占的に掌握されており、その配布は各地の有力者の一元的な格差づけに寄与していたが、やがて新来工人集団の掌握と組織化を経て複数工房における生産とそれぞれの工房を掌握する上位集団による各地への配布体制が構築される。それは結果として甲冑の配布を差配した各集団の自己論理による独立的な生産・配布体制の成立へとつながり、甲冑を用いた一元的な格差づけの論理と社会的機能はその役割を終えていく。これまで倭王権による一元的な生産と配布が論じられていた鉄製甲冑について、王権内における複数勢力による生産とそれらと結びついた各地への配布の実態を論じ、多元的な甲冑の授受の様相を明らかにした。

史林 一〇一卷二号 二〇一八年三月

第一章 はじめに

古墳と呼ばれる特異な厚葬墓が、北は東北北部、南は九州南部までこぞって築造された古墳時代において、その領導者であった倭王権がいかなる軍事組織を有し、また各地の有力者はどのようにそれに参画しあるいは編入されていたのかという問題は、古墳時代ひいては日本における国家形成過程の評価において極めて重要な問題である。

古墳時代の武器や武具のうち、甲冑は当時先進の鍛冶技術を駆使した製品であり、軍事力の物理的側面の重要な一要素

として、あるいは武力の象徴として大きな社会的役割を果たしていたと考えられる。特に古墳時代前期・中期を中心に出土する短甲とそれに組み合う頸甲・肩甲や胄は日本列島各地で同様式のものが出土し、さらに当時の大王墓が営まれた後の畿内地域を中心に多数出土するため、倭王権による生産と各地の有力者への配布が想定されてきた^②。その配布は倭王権と各地の有力者との軍事的同盟の証や、倭王権が各地の有力者とその軍事組織に編入した証と評価され、甲胄の分析から倭王権による地域首長の軍事的編成・掌握過程が描写されてきた^③。古墳に副葬された武器・武具は実に多種に及ぶが、その中でも特に甲胄は古墳時代の軍事組織を論じる上で格好の材料とされてきたのである。

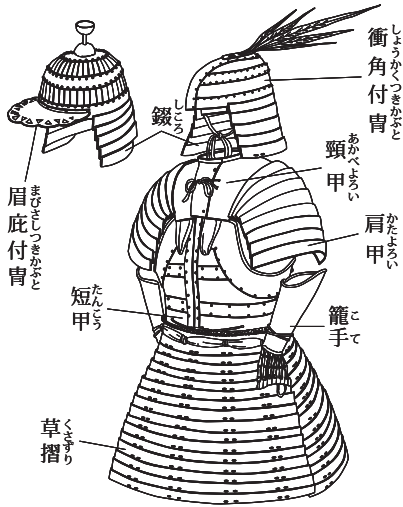
本稿では、古墳時代の甲胄の分析から、倭王権と各地の有力者の関係とその社会的意義の展開を論じる。本稿の検討により、当初は単一の工房が独占的に甲胄の生産と流通を掌握し、その配布により各地の有力者の一元的な格差づけを果たしていたが、やがて新来工人集団の掌握と組織化を経て複数の所管勢力による多元的生産体制が構築され甲胄生産量の増加が図られることで、結果として各所管勢力による独立的な生産・配布体制が成立し、甲胄を用いた格差づけの論理と社会的機能が役割を終えていく状況を明らかにする^④。

① 本稿では、頸甲・肩甲と胄をまとめて付属具と呼称する。籠手や膝当など出土点数が少ない部位を含めて付属具とし、あるいは頸甲・肩甲と胄を主要な武装の一つとして付属具に加えない場合もあるが、論述の簡便さのため右のようにする。なお、肩甲は原則として頸甲に付属するため、頸甲・肩甲とはせず特に必要な場合を除いて両者を含めて単に頸甲と記載する。

② 北野耕平 一九六九 「五世紀における甲胄出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第五四卷第四号 日本考古学会 一一二〇頁など。

③ 甲胄を主たる研究対象とした単著としては、田中晋作 二〇〇一 『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社、藤田和尊 二〇〇六 『古墳時代の王権と軍事』学生社、滝沢 誠 二〇一五 『古墳時代の軍事組織と政治構造』同成社など。

④ 本稿では、詳細な型式的な分析が可能な古墳時代前期・中期を中心とする短甲を中心とした甲胄を検討対象とする。本来ならば同時期的小札甲、古墳時代後期の資料についても合わせて検討すべきだが、今後の課題としておく。



第1図 甲冑の名称

古墳時代の甲冑研究は「型式」「技術」「生産体制」「軍事組織（あるいは政治論）」といったいくつかのテーマがそれぞれ絡み合いながら展開してきた。その今日的な研究の端緒は比較的早く、末永雅雄による古墳時代甲冑の全体像の復元や形式分類、部分名称の設定により基礎が形作られた。^① そうして設定された短甲の地板形態の差や革綴・鋳留という連接技法に基づく形式分類は、小林行雄や大塚初重により編年指標として位置づけられることになる。^②

地板の形態差や連接技法に基づく甲冑編年の大枠が示された後、製作技術論や渡来系工人との関係を含む製作工人論、

生産体制論、軍事組織論といった、その後の甲冑研究でも主要な論点となる種々の視点が北野耕平によって論じられる。^③ 北野によって提示された種々の論点は、野上丈助や小林謙一による型式的分析の深化により、特に技術論・生産組織論において一層の実証性をもって論じられることになる。^④ また、地域を限定したものではあるが、田中新史は甲冑出土古墳の分析から中央と地域の関係を論じるなど、倭王権と各地の政治的關係も視野に入れた研究が現れる。^⑤ なおこの頃には、小林謙一による衝角付冑の衝角底板の連接手法に関する研究や、田中新史による短甲の鋳留位置に関する研究など、地板の形態差や連接技法だけでなくその他の要素についても編年指標になり

第二章 研究史

1 甲冑研究史の展開

うることが示され始めるようになる。

一九七〇年代までに大いに進展した型式論や技術論、生産組織論により、今日の甲冑研究の最大公約的な理解である「倭王権による一元的な生産・配布」という理解が確立した。そうした理解に基づき、一九八〇年代に入ると軍事組織や政治構造に関する議論が大きく展開する。甲冑の副葬に倭王権による軍事的動員を想定した川西宏幸は、最新の形式である横矧板鉾留短甲の出土が九州や関東で多くみられることからその背景に当該時期における倭王権による軍事動員地の広域化を読み取った。^⑥ そうした甲冑分布の分析においては、藤田和尊は頸甲を主軸とした自身の編年を前提に、甲冑セットのいずれかを古相のもので補う「劣ったセット」の抽出や、頸甲や冑の有無という観点を加味することで甲冑の格差を検討し、最新の武器をもつ倭王権と劣位の武器をもつ各地域の首長という姿を描き出した。合わせて、多数の甲冑を出土した古墳の類型化から、各地への甲冑の流通の背景に存在する甲冑の管理・配布体制の展開が論じられた。^⑦ これら分布論と組み合わせの検討の深化の一方で、単一の古墳における甲冑を含む武器・武器セットの分析から、古墳被葬者膝下の軍事組織の復元を試みたのは田中晋作である。^⑧ 古墳から出土する甲冑は第一義的には葬送行為の痕跡であり、被葬者の生前の武装をそのまま反映するとは言えないという松木武彦による批判はあるが、この段階において単一の古墳から出土した一括資料の分析、型式的な新古関係の有無、出土古墳の規模や分布傾向といった現状で想定しうる項目に対する分析はほぼ出揃った感すらある。

このように地板の形態差と連接技法に基づく形式設定と編年から甲冑出土古墳ひいてはその背景に想定される軍事組織に関する研究が大いに進展したが、一九八〇年代末ごろから、その他の要素を主要な編年指標として従来の編年を見直すとする研究が現れる。吉村和昭は鉾留短甲の帯金幅や鉾の大きさ・使用数の分析から、それまで前後関係と考えられていた三角板鉾留短甲と横矧板鉾留短甲が一定期間併行して存在することを示し、さらに同一形式内においても新古関係を把握しうることを明らかにした。^⑩ この視点は滝沢誠が鉾の使用位置の分析を加えることでさらに推し進め、詳細な編年追

究へと展開した。¹¹ 甲冑の持つ多様な要素に注目し、同一形式の甲冑内でのより細かな編年を試みる研究については、前期の方形板革綴短甲では橋本達也と阪口英毅が、¹² 中期の長方形板革綴短甲と三角板革綴短甲では阪口英毅、鈴木一有、松木武彦が¹³ 精力的に進め、特に短甲を中心として地板形態の差は単純な製作の時間差を示すものではなく、一定の併行関係を持ちつつ各形式が変遷するという多系的な変遷観が示されることとなった。

これら多系的で詳細な編年の再構築は、前段階に大いに進められた甲冑出土古墳と軍事組織研究の前提を問い直すものであった。その中で、滝沢誠は自身の編年をもとに倭王権の軍事機構への中小古墳被葬者層の編入が中期前半以降段階的に増加することを論じたものの、¹⁴ それ以外の批判的再検討はやや低調であった。一方で、こうした多系的な編年に対して、田中晋作や藤田和尊は新たな編年観に反論した上で自身の研究の再構成を進めるなど、¹⁵ 新たな展開もみられた。

そうした中で、型式論はより詳細な分析を志向し、甲冑生産の内実の解明が推し進められる。滝沢誠は覆輪技法と蝶番金具の対応から鋌留甲冑にいくつかの系統を見出し、その中でも小鉄板の使用など「同工品」と想定しうる細かな特徴を共有する短甲が存在することを論じた。¹⁶ 吉村和昭は複数の短甲間で同形同大の部材を使用する例があることを明らかにし、共通の「型紙」をもとにした生産を論じた。¹⁷ こうした詳細な研究により、これまで倭王権による一元的生産として論じられてきた生産体制の内実を明らかにする手がかりが得られたといえる。

短甲では地板形態以外の要素への注目により多系的な編年が推し進められたが、衝角付冑と眉庇付冑についても地板形態以外の要素に着目した新たな編年観が橋本達也や山田琴子、鈴木一有によって提示された。¹⁸ また、そうした複数の属性に注目した検討から、川畑純は衝角付冑や眉庇付冑についても生産単位が異なる複数系統が存在することと、それに基づく多系的な編年を提示した。¹⁹

このように甲冑の型的な分析は非常に細かな要素の検討にまで及び進められているが、これら詳細な型的分析の深化の背景には、多面展開による精細な実測図提示の一般化と早くに報告されていた資料の再報告の進展がある。また、韓

国における出土資料の増加と報告、日韓双方の研究者による検討の進展も大きな役割を果たしてきた。それらは北野耕平以来の技術系譜論の深化をもたらし、複合的な技術を持つ渡来系工人が、甲冑のみならず金工品や馬具など各種製品を製作したとする理解が示されている。²⁰⁾一方で、内山敏行は小札を用いた甲冑に加えて馬具や様々な金工品との比較検討から、中期中葉における外来系甲冑の出現の背景に在来甲冑工人と渡来甲冑工人、装飾品工人の協業体制の成立を指摘し、中期中葉には在来・渡来甲冑工人の混成や体制組み換えによる新たな甲冑生産組織が成立するとした。²¹⁾

なお、こうした甲冑研究の多様化と進展に即して、資料の一覧化と甲冑関係論文の集成が随時進められたことも、研究の背景として重要である。²²⁾

2 研究史上の課題と本稿の視点

甲冑を素材とした研究は、出土古墳の規模や分布、付属具の有無、セットの甲冑における新古関係の有無の検討など多くの視点から進められ、一部は軍事組織研究へと進むなど多様な展開をみせてきた。一方で、主に一九八〇年代末以降に進展した多様な属性に基づく多系的な編年は、そうした軍事組織研究の前提としての編年に再検討が必要なことを明らかにした。しかし、革綴短甲、鋌留短甲、衝角付冑、眉庇付冑それぞれの編年は深化したもののそれらを統合した編年は構築されず、新たな総合的な編年に基づく分布やセット関係の再検討が課題として残されていた。

これらの課題に対して筆者は、革綴短甲、鋌留短甲、頸甲、衝角付冑、眉庇付冑という甲冑の主要部位の形式的な分析からそれぞれの系統分化と変遷を明らかにしたうえで組み合わせを検討し、各部位の変遷が非常に整合的に対応することを確認し、甲冑の総合的な編年を提示した。²³⁾加えて、一括資料として一つの古墳から複数の甲冑が出土した際に、形式的に古相の甲冑の方が付属具や金銅装の有無などでより優れていることが一般的であることを示した。こうした検討により、副葬された甲冑セット中のいずれかの部位を形式的に古式となる資料で補う「劣ったセット構成」はごく例外的であるこ

と、また、これまで古墳時代の武器・武具研究の前提とされていた「最新の武器」こそがより高い評価を受けているという想定が成り立たないことが明らかとなった。

一方で、新たに提示した編年と系統差の認識に基づく甲冑の生産体制の復元と、それを踏まえた付属具の有無や分布等の分析については未着手であり課題として残されたままであった。それらが甲冑による軍事組織研究の基礎となる部分である。そこで本稿では筆者が新たに提示した甲冑編年と系統差の理解に基づき、甲冑の生産体制と倭王権一地域による授受の実態とその社会的意義を明らかにする。

- ① 末永雅雄 一九三四 『日本上代の甲冑』岡書院。のち、末永雅雄 一九八一 『増補 日本上代の甲冑』木耳社。
- ② 小林行雄 一九五一 『日本考古学概説』東京創元社、大塚初重 一九五九 『大和政権の形成』『世界考古学大系』三 日本Ⅲ 平凡社。
- ③ 北野耕平 一九六三 『中期古墳の副葬品とその技術史的意義―鉄製甲冑における新技術の出現―』『近畿古文化論攷』吉川弘文館 一六三―一八四頁、北野耕平 一九六九 『五世紀における甲冑出土古墳の諸問題』(前掲)。
- ④ 野上丈助 一九六八 『古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義』『考古学研究』第一四巻第四号 考古学研究会 一一―四三頁、野上丈助 一九七五 『甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上』『考古学研究』第二二巻第四号 考古学研究会 三四―五八頁、小林謙一 一九七四 『甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上)』『考古学研究』第二〇巻第四号 考古学研究会 四八―六八頁、小林謙一 一九七四 『甲冑製作技術の変遷と工人の系統(下)』『考古学研究』第二二巻第二号 考古学研究会 三七―四九頁。
- ⑤ 田中新史 一九七五 『五世紀における短甲出土古墳の二様相―房総出土の短甲とその古墳を中心として』『史館』第五号 弘文社 八〇―一〇三頁、田中新史 一九七八 『御嶽山古墳出土の短甲』『考古学雑誌』第六四巻第一号 日本考古学会 二八―四四頁。
- ⑥ 川西宏幸 一九八三 『中期畿内政権論』『考古学雑誌』第六九巻第二号 日本考古学会 一一―三五頁。
- ⑦ 藤田和尊 一九八四 『頸甲編年とその意義』『関西大学考古学研究紀要』四 関西大学考古学研究室 五五―七二頁、藤田和尊 一九八八 『古墳時代における武器・武具保有形態の変遷』『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館 四二五―五一〇頁、のち、藤田和尊 二〇〇六 『古墳時代の王権と軍事』(前掲)。
- ⑧ 田中晋作 一九八一 『武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格』『ヒストリア』第九三号 大阪歴史学会 一一―二〇頁、田中晋作 一九九三 『武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について(上)』『古代文化』第四五巻八号 古代学協会 一三―二二頁、田中晋作 一九九三 『武器の所有形態からみた常備軍成立の可能性について(下)』『古代文化』第四五巻一〇号 古代学協会 一四―二三頁、のち、田中晋作 二〇〇一 『百舌鳥・古市古墳群の研究』(前掲)。
- ⑨ 松木武彦 一九九四 『古墳時代の武器・武具および軍事組織研究

- の動向」『考古学研究』第四一巻第一号 考古学研究会 九四—一〇四頁、松木武彦 一九九五 「考古資料による軍事組織研究の現状と展望」『展望考古学』 考古学研究会四〇周年記念論集 考古学研究会 一四八—一五三頁。対して、田中晋作 一九九五 「古墳時代中期における軍事組織について」『考古学研究』第四一巻第四号 考古学研究会 九六—一〇三頁、藤田和尊 一九九五 「古墳時代中期における軍事組織の実体」『考古学研究』第四一巻第四号 考古学研究会 七八—九五頁、といった議論がなされた。
- ⑩ 吉村和昭 一九八八 「短甲系譜試論—銚留技法導入以後を中心として—」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第一三冊 奈良県立橿原考古学研究所 一三—三九頁。
- ⑪ 滝沢 誠 一九九一 「銚留短甲の編年」『考古学雑誌』第七六巻第三号 日本考古学会 一六一—一六二頁、のち、滝沢 誠 二〇一五 「古墳時代の軍事組織と政治構造」(前掲)。
- ⑫ 橋本達也 一九九八 「堅矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」『青丘學術論集』第二二集 韓国文化研究振興財団 四七—七六頁、阪口英毅 二〇一〇 「帯金式甲冑の成立」『遠古登攀』 遠古登攀刊行会 真陽社 三〇五—三二〇頁。
- ⑬ 阪口英毅 一九九八 「長方形板革綴短甲と三角板革綴短甲—変遷とその特質—」『史林』第八一巻第五号 史学研究会 一—三九頁、鈴木一有 一九九六 「三角板系短甲について—千人塚古墳の研究」(一) 『浜松市博物館館報』Ⅷ 浜松市博物館 二—三四五頁、鈴木一有 二〇〇八 「前胴長方形分割の三角板短甲」『森町田丘古墳の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第一八六集 静岡県埋蔵文化財調査研究所 二七一—二八三頁、松木武彦 二〇一〇 「古墳時代中期短甲の変遷とその背景」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室二〇周年記念論集—』 大阪大学考古学友の会 四六五—四八〇頁。
- ⑭ 滝沢 誠 一九九四 「甲冑出土古墳からみた古墳時代前・中期の軍事編成」『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』 雄山閣出版 一九八—二一五頁、のち、滝沢 誠 二〇一五 「古墳時代の軍事組織と政治構造」(前掲)。
- ⑮ 田中晋作 二〇〇一 『百舌鳥・古市古墳群の研究』(前掲)、藤田和尊 二〇〇六 『古墳時代の王権と軍事』(前掲)。
- ⑯ 滝沢 誠 二〇〇八 『古墳時代中期における短甲の同工品に関する基礎的研究』 静岡大学人文学部、のち、滝沢 誠 二〇一五 「古墳時代の軍事組織と政治構造」(前掲)。
- ⑰ 吉村和昭 二〇一四 『三次元レーザー計測を利用した古墳時代甲冑製作の復元的研究』平成二三年度—二五年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C) 研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所、吉村和昭 二〇一七 『古墳時代甲冑製作における「型紙」の事例発見とその意義』(科学研究費による研究成果リーフレット) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- ⑱ 橋本達也 一九九五 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義—眉庇付冑を中心として—」『考古学雑誌』第八〇巻第四号 日本考古学会 一—三三頁、山田琴子 二〇〇二 「小札銚留角付冑と横矧板銚留角付冑」『溯航』第二〇号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会 一六一—三六頁、鈴木一有 二〇一二 「小札銚留角付冑の変遷とその意義」『マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第一七三集 国立歴史民俗博物館 四三五—四五六頁。
- ⑲ 川畑 純 二〇一五 『武器が語る古代史—古墳時代社会の構造転換—』プリミエコレクション六〇 京都大学学術出版会。
- ⑳ 福尾正彦 一九八七 「眉庇付冑の系譜—その出現期を中心に—」

『東アジアの考古と歴史』 同朋舎 一三五―一六七頁、塚本敏夫
一九九三 「銕留甲冑の技術」『月刊考古学ジャーナル』No.366
ニュー・サイエンス社 二二―二六頁、橋本達也 一九九五 「古墳
時代中期における金工技術の変革とその意義―眉庇付冑を中心として
―」（前掲）など。

②¹ 内山敏行 二〇〇八 「古墳時代の武器生産―古墳時代中期甲冑の
二系統を中心に―」『地域と文化の考古学』Ⅱ 明治大学文学部考古
学研究室 三七九―三九二頁。

②² 柳沢一男ほか 一九九三 『甲冑出土古墳にみる武器・武器の変
遷』 第三三回埋蔵文化財研究会 埋蔵文化財研究会、橋本達也・
鈴木一有 二〇一四 『古墳時代甲冑集成』 大阪大学大学院文学研

究科 阪口英毅 二〇一三 「⑨甲冑」『副葬品の型式と編年』古墳
時代の考古学四 同成社 一一―二四頁、阪口英毅 二〇一七
「甲冑研究の動向―2010年代を中心に―」『月刊 考古学ジャーナ
ル』No.701 ニュー・サイエンス社 五―九頁。韓国における集
成は、李賢珠（編） 二〇一〇 『韓国の古代甲冑』 福泉博物館学
術研究叢書 福泉博物館、金赫中（編） 二〇一五 『갑옷 전사의
상』 国立金海博物館。

②³ 川畑 純 二〇一六 『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱
いの研究』平成二四―二七年度科学研究費（学術研究助成基金助成金
（若手研究（B））研究成果報告書 奈良文化財研究所。

第三章 分析の前提

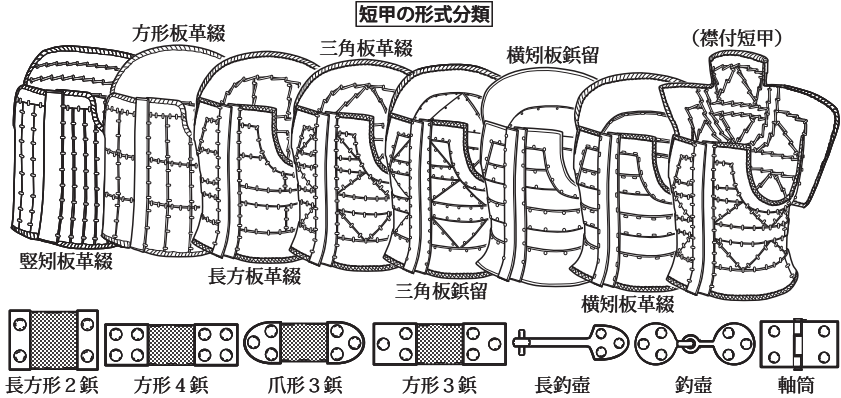
1 銕留短甲の系統について

銕留甲冑に複数の系統が存在することは研究史中で紹介したとおりである。詳細な論証は別稿に譲るが、それは、
①銕留短甲には技術的・構造的な特徴を異にするいくつかの系統が存在する。

②それら各系統は部材の製作から組み立てまで一定の独自性を持つ。

③各系統は金銅や皮革の使用など異なる技術的の基盤や選択指向をもち、それは素材の確保や技術・工人編成といった
基幹部分の違いを反映する。

④ただし、各系統間での生産体制は一樣に離れて独立しているのではなく、一定の近縁関係を持つ系統も存在する。
と約言できる。特に新相の銕留甲冑はいくつかの単位である程度独立的に生産されていたと考えられる。



第2図 短甲の形式分類と蝶番金具の分類

ちなみに短甲の系統は、視覚的に最もわかりやすい要素である蝶番金具の違いにより代表させて名称をつけており、開閉構造を持たない「胴一連系統」、「長方形2鉞系統」、「方形4鉞系統」、「方形3鉞系統」（爪形3鉞の蝶番金具のものを含む）、「長釣壺系統」、「釣壺系統」、「軸筒系統」と各系統を呼称する（第2図・第3図）。

2 甲冑の時期設定

詳細は前稿^①によるが、本稿での編年は次の一二期に基づく。

1期 鉄製短甲が出現。縦矧板革綴短甲とそれに続く古相の方形板革綴短甲からなる。（前期中葉～後葉・四世紀前葉～中葉ごろ）

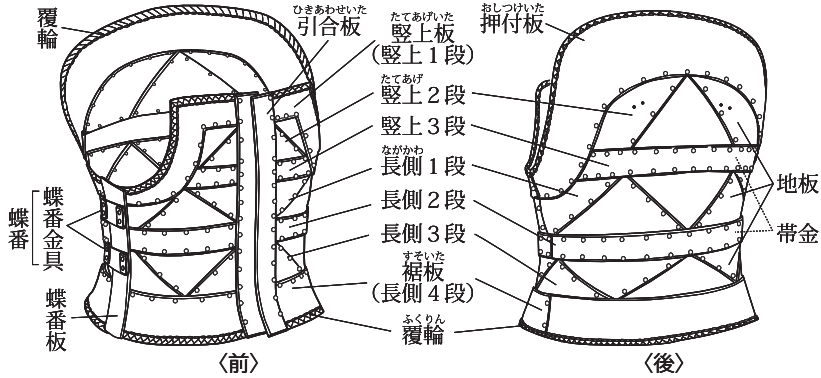
2期 方形板革綴短甲の型式変化が進み、新相の一群が出現。（前期後葉～末・四世紀中葉ごろ）

3期 帯金に代表されるフレーム構造^②が採用され、長方板革綴短甲が成立。（前期末～中期初頭・四世紀後葉～末ごろ）

4期 三角板革綴短甲が成立し、長方板革綴短甲と併存。頸甲・肩甲や三角板革綴衝角付冑が出現。（中期初頭～前葉・四世紀末ごろ）

5期 前段階と基本的な組み合わせは同じだが、型式変化が進む。（中期前葉～五世紀初頭ごろ）

6期 連接方式に鉄留技法が出現。長方形2鉞系統の短甲や鉄留衝角付



第3図 短甲の部分名称

冑、眉庇付冑が成立。(中期前葉～中葉・五世紀前葉ころ)

7期 胴一連系統、長釣壺系統、方形4鉾系統の鉾留短甲が出現し、短甲生産が多系化。革綴短甲の生産が終了。頸甲・衝角付冑・眉庇付冑とも型式変化が進む。(中期中葉・五世紀前葉～中葉ころ)

8期 横矧板鉾留短甲や内接式の衝角付冑が成立するなど、型式変化が進む。(中期中葉～後葉・五世紀中葉ころ)

9期 いずれも型式変化が進む。前胴にも三角板を用いる三角板鉾留短甲の生産はこの段階で終了。釣壺系統、方形3鉾系統の短甲が成立。(中期後葉・五世紀後葉ころ)

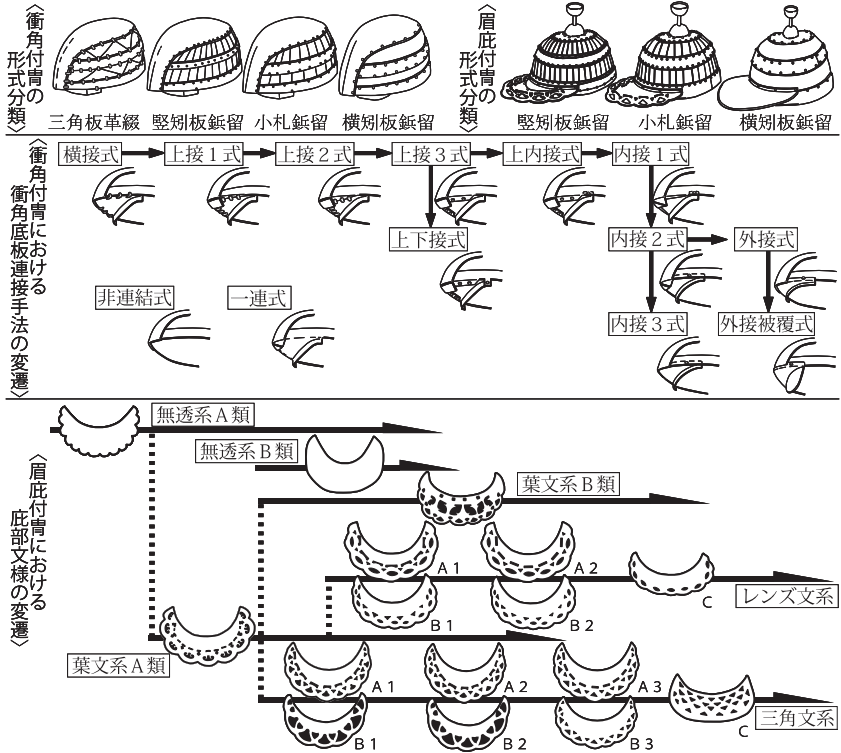
10期 三角板・横矧板併用鉾留短甲と横矧板鉾留短甲、横矧板革綴短甲からなる。この段階で眉庇付冑の生産が終了。(中期後葉・五世紀後葉ころ)

11期 三角板を使用する短甲が完全にみられなくなる。頸甲と小札鉾留衝角付冑の生産はこの段階で終了。(中期末・五世紀末ころ)

12期 段階設定としてやや心許ないが、横矧板鉾留短甲と横矧板鉾留衝角付冑のみからなる。(中期末・五世紀末ころ)

3 衝角付冑・眉庇付冑の系統と変遷

古墳時代中期の主要な冑である衝角付冑と眉庇付冑についてもすでに詳細を論じたところである。その概要は次の通りである(第4図)。



第4図 宵の形式と衝角付宵の衝角底板連接手法・眉庇付宵の庇部文様の変遷

衝角付宵は衝角底板の連接手法の違いから変遷と系統差が判明する。4期の成立当初は横接式から上接1式・2式・3式へと単一系統で変化し、その後、上接3式から上内接式、内接1式、内接2式、内接3式へと変化する。その一方で、6期には少数例だが上接3式から分化する形で上下接式が成立し、さらに8期から9期ごろには内接2式から分化する形で外接式が成立し主要な系列をなす。時期にもよるが6期以降は上下接式、上内接式、内接式、外接式の二、三系統が併存する。そうした型式変化に合わせて主要な地板の形態もおおむね三角板から小札、横矧板へと変化する。

眉庇付宵は庇部文様の違いが生産系統の違いを最も明瞭に示す。6期の主たる型式の成立段階からすでに複数系統が認められ、無透系、葉文系A類・B類、三角文系A類・B類、レンズ文系A類・B類と分類で

きる。うち、レンズ文系と三角文系はA1類からA2類、A3類というように文様が変化する。地板の形態は堅矧板が古相だが、小札や横矧板もやや遅れて出現しそれぞれが併存する。また、眉庇付冑では系統の違いと冑の金銅装の有無が概ね対応しており、金銅装とする（Ⅱ金銅を使用する技術を持つ）系統と技術を持たない系統に分かれる。こうした様相は短甲における系統の違いと蝶番金具の金銅装の有無という状況と一致しており、甲冑の生産においては金銅を使用する技術を持つ系統と持たない系統があることがわかる。

頸甲・衝角付冑・眉庇付冑についてもそれぞれ詳細な型式変遷を論じることが可能だが、組み合う短甲と矛盾なく変遷するため、以下、数量的にも組み合わせ的にも主となる短甲の時期区分である右記の12期の変遷をもとに議論を進める。

① 川畑 純 二〇一六 『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱
いの研究』（前掲）。

② 長方板革綴短甲以降の短甲は、押付板や裾板、帯金といった短甲の
枠組を構成する部材の間に地板を配置することで短甲全体を構成する

もので、それ以前の堅矧板革綴短甲や方形板革綴短甲とは製作手順や
設計構造上大きな違いがある。こうしたフレーム構造を持つ甲冑は

「帯金式甲冑」と呼称され、その出現が製作技術上の画期とされる。
古谷 毅 一九九六 「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑
誌』第八一巻第四号 日本考古学会 五八一―八五頁。

③ 川畑 純 二〇一五 『武器が語る古代史―古墳時代社会の構造転
換―』（前掲）。

第四章 甲冑の組み合わせと系統・格差

1 甲冑の組み合わせの変遷

以下、特に断りのない限り、本稿の末に提示した一覧（第4表）に基づき分析する。ここで提示・検討したものは、段階設定と系統区分が可能なる程度遺存状態の良い短甲を中心とする甲冑に限定している。また、組み合わせとして提示した頸甲や冑は原則として出土時の組み合わせに基づく。そのため、同一古墳から付属具が出土していても別の甲に組み

第1表 短甲の形式と組み合う付属具

	短甲の形式	短甲のみ	短甲+頸甲	短甲+胄	短甲+頸甲+胄	検討数
4期	長方板革纒短甲	1 (16.7)	4 (66.7)	0	1 (16.7)	6
	三角板革纒短甲	2 (40.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	5
	4期合計	3 (27.3)	5 (45.5)	1 (9.1)	2 (18.2)	11
5期	長方板革纒短甲	3 (27.3)	1 (9.1)	1 (9.1)	6 (54.5)	11
	三角板革纒短甲	5 (45.5)	0	4 (36.4)	2 (18.2)	11
	5期合計	8 (36.4)	1 (4.5)	5 (22.7)	8 (36.4)	22
6期	長方板革纒短甲	2 (66.7)	0	0	1 (33.3)	3
	三角板革纒短甲	7 (30.4)	2 (8.7)	4 (17.4)	10 (43.4)	23
	三角板鉾留短甲	0	0	0	2 (100.0)	2
	変形板革纒・鉾留短甲	0	0	2 (66.7)	1 (33.3)	3
6期合計	9 (29.0)	2 (6.4)	6 (19.3)	14 (45.2)	31	
7期	三角板鉾留短甲	4 (22.2)	0	3 (16.7)	11 (61.1)	18
	変形板鉾留短甲	0	0	1 (100.0)	0	1
	7期期合計	4 (21.1)	0 (0.0)	4 (21.1)	11 (57.9)	19
8期	三角板鉾留短甲	4 (26.7)	1 (6.7)	0	10 (66.7)	15
	横矧板鉾留短甲	13 (68.4)	0	1 (5.3)	5 (26.3)	19
	8期合計	17 (50.0)	1 (2.9)	1 (2.9)	15 (44.1)	34
9期	三角板鉾留短甲	7 (53.8)	0	2 (15.4)	4 (30.8)	13
	横矧板鉾留短甲	8 (53.3)	0	2 (13.3)	5 (33.3)	15
	9期期合計	15 (53.6)	0 (0.0)	4 (14.3)	9 (32.1)	28
10期	三角板鉾留短甲	3 (100.0)	0	0	0	3
	横矧板鉾留・革纒短甲	21 (72.4)	1 (3.4)	3 (10.3)	4 (13.8)	29
	10期合計	24 (75.0)	1 (3.1)	3 (9.4)	4 (12.5)	32
11・12期	横矧板鉾留・革纒短甲	19 (82.6)	0	1 (4.3)	3 (13.0)	23
	11・12期合計	19 (82.6)	0 (0.0)	1 (4.3)	3 (13.0)	23
全時期合計	長方板革纒短甲	6 (30.0)	5 (25.0)	1 (5.0)	8 (40.0)	20
	三角板革纒短甲	14 (35.9)	3 (7.7)	9 (23.1)	14 (35.9)	39
	三角板鉾留短甲	18 (35.3)	1 (2.0)	5 (9.8)	27 (52.9)	51
	横矧板鉾留・革纒短甲	61 (70.9)	1 (1.2)	7 (8.1)	17 (19.8)	86
	変形板革纒・鉾留短甲	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	4
	合計	99 (49.2)	10 (5.0)	25 (12.4)	67 (33.3)	201

各項目は「点数(比率)」を示す。いずれも襟付短甲並びに甲胄の組み合わせが不明なものは含んでいない。

合う場合など、一覧に記載していない場合がある。第1表として、短甲の形式ごとに組み合う付属具の状況を、第2表として短甲の系統ごとに組み合う付属具と胄の型式を提示した。

1期・2期・3期は頸甲と胄の出現以前の段階で、組み合わせを検討できない。1期・2期の堅矧板革纒短甲・方形板革纒短甲の特徴として、出土古墳が前方後円墳・前方後方墳や近畿・九州北部の円墳・方墳に限られるという点が、後続する長方板革纒短甲・三角板革纒短甲との違いとして論じられてきた^①。こうした特徴は3期にも同様に認められ、1期〜3期は頸甲や胄の不在と合わせて一連で評価できる。帯金などのフレイム構造を持つ長方板革纒短甲の出現が短甲生産の画期として論じられることが多いが、それはあく

第2表 短甲の系統と組み合う付属具

	短甲の系統	短甲のみ	短甲+頸甲	短甲+冑	短甲+頸甲+冑	検討数
6期	長方形2鉢	0	0	2 (66.7) / 衝2(上2:2)	1 (33.3) / 冑1(無A:1)	3
	6期合計	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	2 (50.0)	4
7期	胴一連	1 (20.0)	0	1 (20.0) / 冑1(葉B:1、三A:1)	3 (60.0) / 衝1(上内:1) / 冑2(三B:1、レB:1)	5
	長方形2鉢	3 (33.3)	0	1 (11.1) / 冑1(葉B:1)	5 (55.6) / 衝2(上内:1、上下:1) / 冑3(葉A:1、三A:2)	9
	方形4鉢	0	0	0	2 (100.0) / 衝2(外:1、不明:1)	2
	長釣壺	0	0	3 (75.0) / 冑3(葉B:1、レ?:2)	1 (25.0) / 冑1(レA:1)	4
	7期合計	4 (20.0)	0 (0.0)	5 (25.0)	11 (55.0)	20
8期	胴一連	3 (27.3)	0	0	8 (72.7) / 衝1(内1:1) / 冑7(三A:1、レA:3、レB:3)	11
	長方形2鉢	7 (53.8)	1 (7.7)	1 (7.7) / 冑1(レA:1)	4 (30.8) / 衝4(上3:1、内2:1、内3:1、不明:1)	13
	方形4鉢	5 (71.4)	0	0	2 (28.6) / 衝2(外:2)	7
	長釣壺	2 (66.7)	0	0	1 (33.3) / 冑1(レA:1)	3
	8期合計	17(50.0)	1 (2.9)	1 (2.9)	15 (44.1)	34
9期	胴一連	2 (20.0)	0	2 (20.0) / 衝1(上下:1) / 冑1(レ?:1)	6 (60.0) / 衝5(上3:1、外:2、不明:2) / 冑1(レB:1)	10
	長方形2鉢	3 (75.0)	0	1 (25.0) / 冑1(不明:1)	0	4
	方形4鉢	5 (62.5)	0	1 (12.5) / 冑1(三C:1)	2 (25.0) / 衝2(内1:1、内?:1)	8
	方形3鉢	1 (50.0)	0	0	1 (50.0) / 冑1(外:1)	2
	長釣壺	2 (100.0)	0	0	0	2
	釣壺	1 (100.0)	0	0	0	1
9期合計	15(53.6)	0 (0.0)	4 (14.3)	9 (32.1)	28	
10期	長方形2鉢	11(91.7)	0	1 (8.3) / 衝1(不明:1) / 冑1(レ?:1)	0	12
	方形4鉢	5 (50.0)	1 (10.0)	1 (10.0) / 冑1(内3:1)	3 (30.0) / 衝3(内2:1、外:1、不明:1)	10
	方形3鉢	5 (83.3)	0	1 (16.7) / 衝1(上2:1)	0	6
	長釣壺	1 (100.0)	0	0	0	1
	釣壺	2 (100.0)	0	0	0	2
	軸筒	0	0	0	1 (100.0)	1
	10期合計	24(75.0)	1 (3.1)	3 (9.4)	4 (12.5)	32
11・12期	長方形2鉢	5 (62.5)	0	1 (12.5) / 衝1(上下:1)	2 (25.0) / 衝2(内2:1、外:1)	8
	方形4鉢	5 (83.3)	0	0	1 (16.7) / 冑1(内1:1)	6
	方形3鉢	6 (100.0)	0	0	0	6
	長釣壺	1 (100.0)	0	0	0	1
	釣壺	1 (50.0)	0	0	1 (50.0) / 冑1(外:1)	2
	軸筒	1 (100.0)	0	0	0	1
	11・12期合計	18(75.0)	0 (0.0)	2 (8.3)	4 (16.7)	24
全時期合計	胴一連(鉢留)	6 (23.1)	0	3 (11.5)	17 (65.4)	26
	長方形2鉢	29(59.2)	1 (2.0)	7 (14.3)	12 (24.5)	49
	方形4鉢	20(60.6)	1 (3.0)	2 (6.1)	10 (30.3)	33
	方形3鉢	12(85.7)	0	1 (7.1)	1 (7.1)	14
	長釣壺	6 (54.5)	0	3 (27.3)	2 (18.2)	11
	釣壺	4 (80.0)	0	0	1 (20.0)	5
	軸筒	1 (50.0)	0	0	1 (50.0)	2
合計	77(55.0)	2 (1.4)	17(12.1)	44(31.4)	140	

【凡例】

各枠内は点数(比率)を示す。衝3や冑2などは衝角付冑3点や冑底付冑2点ということを示す。()内は系統:点数。
衝角付冑=上内:上内接式、上下:上下接式、内1:内接1式、内2:内接2式、内3:内接3式、外:外接式、一連:一連式。
冑底付冑=葉A:葉文系A類、葉B:葉文系B類、三A:三角文系A類、三B:三角文系B類、レA:レズ文系A類、
レB:レズ文系B類、レ?:レズ文系A類またはB類、三A1などの数字は三角文系A1類であることを示す。

まで形式的な画期であり、型式変化がそのまますぐに生産体制の革新や出土古墳の様相の違いには直結しない。

4期は頸甲と衝角付冑が出現し、長方板革綴短甲と三角板革綴短甲が併存するなど、3期までと比べて大きな変化をみせる。長方板革綴短甲は提示した六例のうち五例が頸甲と、一例が冑と組み合う。一方の三角板革綴短甲は襟付短甲を除けば、提示した五例のうち二例が頸甲と、二例が冑と組み合う。長方板革綴短甲は頸甲と組み合うものが多く、三角板革綴短甲は頸甲と組み合うものが少ないという傾向が認められる。

そうした4期の傾向は5期にも継続する。長方板革綴短甲一例は頸甲七例、冑七例と組み合うのに対し、襟付短甲を除く三角板革綴短甲一例は頸甲二例、冑六例と組み合う。明らかに頸甲と組み合う比率で長方板革綴短甲と三角板革綴短甲に違いがある。

4期・5期の様相は6期に長方板革綴短甲が激減すると大きく変化する。長方板革綴短甲三例は頸甲一例、冑一例と組み合い、襟付短甲を除く三角板革綴短甲二三例は頸甲一二例、冑一四例と組み合う。5期までは三角板革綴短甲と頸甲の組み合わせは稀であったが、長方板革綴短甲の激減・終焉に伴いその機能を継承するかのように頸甲との組み合わせが多くなる。なお、6期には長方形2銚系統の銚留短甲が出現するが、いずれも冑と組み合う。

7期には革綴短甲がみられなくなる一方で、銚留短甲の多系化が生じる。必ずしも明瞭に分かれる訳ではないが、胴一連系統の短甲は葉文系B類・レンズ文系B類・三角文系A類の眉庇付冑と、長方形2銚系統の短甲は葉文系A類・B類と三角文系A類の眉庇付冑と、長釣壺系統の短甲は葉文系B類・レンズ文系の眉庇付冑と組み合う傾向があるなど、短甲の系統と眉庇付冑の系統に一定の相関性が認められる。二例だけが方形4銚系統の短甲はどちらも衝角付冑と組み合う点も、短甲の系統と冑の対応といえるだろうか。

8期には横矧板銚留短甲が出現するが、三角板銚留短甲に比べて明らかに付属具の共伴率が低い。三角板銚留短甲一五例のうち一〇例で頸甲と冑を伴い、短甲だけのものは4例であるのに対し、横矧板銚留短甲では一九例のうち頸甲と冑を

伴うのは五例で、一三例は短甲のみである。付属具の共伴率からすると前段階から存在していた三角板鋳留短甲をより上位に、新たに導入された横刃板鋳留短甲を下位に位置づけることで、新たな形式の短甲が導入されたことがわかる。系統ごとにとみると、胴一連系統の短甲一一例のうち一例のみが衝角付冑と組み合うのに対し、七例が眉庇付冑と組み合う。一方、長方形2鋳系統のもの一三例では衝角付冑は確実なもので四例組み合うのに対して眉庇付冑は一例と、明らかに胴一連系統のものと組み合う冑の種類に違いをみせる。長方形2鋳系統と組み合う衝角付冑は内接式のものが多く点も注目される。方形4鋳系統のもの七例のうち冑と組み合うのは二例のみだが、どちらも外接式の衝角付冑である。短甲の系統と組み合う冑が衝角付冑か眉庇付冑かという点に一定の関係が認められる。

9期には8期の横刃板鋳留短甲導入当初にみられた三角板鋳留短甲との付属具共伴率の格差は消滅する。また、眉庇付冑の数が減少することで組み合わせの様相が一変する。眉庇付冑と組み合う割合が高かった胴一連系統では、一〇例のうち六例が衝角付冑と、二例が眉庇付冑と組み合い、六例で頸甲と組み合う。長方形2鋳系統では確実なものでは眉庇付冑との組み合わせは一例のみで、頸甲との確実な組み合わせはみられない。方形4鋳系統では一例で眉庇付冑と、二例で衝角付冑と組み合い、方形3鋳系統では一例で頸甲と衝角付冑の組み合わせがみられる。

10期には胴一連系統がみられなくなる。長方形2鋳系統では一二例のうち大阪府黒姫山古墳二三号短甲一例のみが衝角付冑・眉庇付冑の両方が入れ込まれた形で出土しているが、他には頸甲や冑と組み合うものはみられず、9期と同様に付属具を伴わない系統として明確な特徴を示す。一方の方形4鋳系統は一〇例のうち四例が衝角付冑と、四例が頸甲と組み合い、短甲に対して付属具の割合が減る中で明らかに高い付属具の共伴率をみせる。9期までは付属具は胴一連系統に伴うことが多いが、胴一連系統の生産終了とともに、付属具との組み合わせは方形4鋳系統に移行したとみることができ。また、10期以降主流な系統となる方形3鋳系統では、冑と組み合うのが六例中一例のみで、付属具との組み合わせが非常に限られる。

12期は類例が少なく、また段階設定としてやや不安定なので11期・12期をまとめて検討する。長方形2鋳系統のもの八例は、衝角付冑三例、頸甲二例と組み合わせる。方形4鋳系統では六例中一例が頸甲と衝角付冑と組み合わせる。方形3鋳系統は甲冑の組み合わせが不明なものが多いが、確実に付属具と組み合わせるものは現状で認められない。^④

2 甲冑の組み合わせの意味

いくつかの段階ごとに短甲と付属具の組み合わせ状況に変化がみられることがわかった。それは1～3期、4・5期、6・7期、8・9期、10～12期の五段階に分けて理解できる。

I段階（1～3期）…付属具の無い段階で組み合わせを検討できないが、いずれも前方後円墳・前方後方墳や、近畿地方と九州北部の円墳・方墳からの出土に限られ、各期が同様の様相を示すといえる。

II段階（4期・5期）…頸甲と組み合わせる長方形革綴短甲と組み合わせない三角板革綴短甲という、短甲の形式と付属具の有無に高い相関性がみられる。

III段階（6期・7期）…長方形革綴短甲の激減に対して多くの三角板革綴短甲が頸甲と組み合わせようになり、形式差や系統差と関係しない短甲・頸甲・冑という組み合わせが確立する。非常に高い割合で付属具が伴う。

IV段階（8期・9期）…短甲の系統ごとに組み合わせる付属具に明確な差が現れる。胴一連系統は付属具の共伴率が非常に高く、他系統は相対的に低い。特に8期を中心に、胴一連系統や長釣壺系統の短甲には眉庇付冑が、長方形2鋳系統や方形4鋳系統には衝角付冑が伴う。

V段階（10～12期）…引き続き短甲の系統と付属具の共伴状況に明確な差がみられる。これまで付属具の共伴率が非常に高かった胴一連系統の消滅後、その特徴を引き継ぐかのように方形4鋳系統に付属具が多くみられるようになる。ただし、全体的に付属具の数が減少しており、短甲のみの事例が多い。

長方板革綴短甲と三角板革綴短甲は型式変化の方向性や脇部などの地板配置方式が共通するため、完全な別系統として別個に生産されたとは考え難い。頸甲を伴う武装としての長方板革綴短甲、伴わない三角板革綴短甲という、付属具を含めた武装様式の違いとして両者は理解できる。そうした違いも6期には長方板革綴短甲が激減し三角板革綴短甲と頸甲の共伴率が一気に上昇することから、長方板革綴短甲が担った武装様式が三角板革綴短甲に集約されたことがわかる。あるいは、頸甲を伴わないという武装様式の消滅が、長方板革綴短甲の終焉をもたらしただのかもしれない。いずれにしろ、II段階とした4期・5期には短甲の地板の違いや付属具の有無は、甲冑全体での武装様式を相補的に補完する形で機能し、格差づけられていたといえる。

7期の銕留短甲の一般化と短甲の系統分化後は、短甲と組み合わせる冑の型式に一定の対応関係がみられるようになる。短甲や冑の系統差が生産系統の違いを反映することは先に述べたが、であるならば、こうした現象はいくつかの生産系統がある程度のまとまりをもって短甲と冑の生産を担った姿を反映したものといえる。その中で、付属具を比較的多く生産する系統、ほぼ短甲の生産のみに限定する系統というように、独自の体制を確立していったものと考えられる。

9期以降こうした短甲系統と付属具の組み合わせの違いが大きくなる。特に注目されるのが長方形2銕系統で、7期には半数を超え、8期にも四割近くに及んだ冑の共伴率が二割程度にまで落ち込む。9期以降、系統別では冑の共伴率が最も高い方形4銕系統でも三割程度なのでそれほど大きな違いにはみえないかもしれないが、9期以降の長方形2銕系統の短甲に組み合わせる冑の数には衝角付冑と眉庇付冑が一点ずつ入れ込まれていた黒姫山古墳二三号短甲での二点が含まれているので、実際の組み合わせ比率はより低い。また、冑を伴う確実な五例のうち三例が黒姫山古墳から、二例が島内地下式横穴墓群からの出土という特定の古墳や地域に集中する状況も、特殊事例とすべきだろうか。

頸甲の共伴率の差はより顕著で、7期・8期には長方形2銕系統の短甲の五割弱に頸甲が伴うが、9期以降では二三例中二例しか頸甲と組み合わせない。方形4銕系統では二割程度の短甲に頸甲が伴うので、系統ごとの差は大きい。7期・8

期のように、短甲の系統と胃の系統に一定の関係がみられる状況とは異なり、9期以降には方形4鋸系統のように付属具を多く持つ系統と、長方形2鋸系統や方形3鋸系統のように付属具をほとんど持たない系統というように、系統ごとの付属具の有無に大きな差が現れる。

3 系統と生産

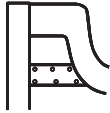
こうした、特に9期以降の短甲の系統ごとにみられる付属具の相伴率の大きな差の意味を考える上で、改めて各系統の型的な特徴を検討したい。短甲の系統ごとの違いには、覆輪技法や小鉄板使用の有無^⑤、前胴壁上の帯金の有無等があるが、ここでは前胴壁上3段の帯金に使用する鋸の数と用いる部材の大きさに注目する。

前胴壁上3段の帯金に使用する鋸の数を各系統ごとにまとめたのが第3表である。鋸数は「A+B」のように示しているが、その場合、壁上3段の帯金に使用する鋸のうち上段の鋸数がA、下段の鋸数がBということの意味する。壁上3段の帯金をもたず、壁上2段の地板と長側1段の地板を直接接続する前胴6段構成の短甲については「C」のような形での提示となる。^⑥

ここでは資料数が一定数ある胴一連系統・長方形2鋸系統・方形4鋸系統・方形3鋸系統・長釣壺系統を検討する。定期的に古い手法である「3+3」以上から最も新しい手法である「1+1」まで各系統で多寡がありそれぞれの系統の盛行時期の違いを示すが、^⑦その中でも「1+2」のあり方に系統ごとの特徴が表れる。胴一連系統・方形4鋸系統・方形3鋸系統・長釣壺系統では「1+2」の数は各系統内での使用鋸数の漸次的な減少として理解できるが、長方形2鋸系統では「1+2」は一点だけで、^⑧基本的に「1+2」という鋸の使用法を経由せずに「1+1」に至ることがわかる。長方形2鋸系統は鋸の使用法で他の系統と明らかに異なる特徴を示しているのである。ちなみに前胴壁上3段の帯金に使用する鋸数が「1+2」になるものはおおよそ9期から10期ごろに現れる特徴である。

第3表 系統ごとの前胴壁上3段の鉾数

鉾数	胴一連	長方形2鉾	方形4鉾	方形3鉾	長釣壺	釣壺	軸筒
3+3以上	7	7	2		5		
2+3		2				1	
2+2(または2)	10	24	16	6	3	2	2
1+2	2	1	6	8	3		
1+1(または1)	1	10	7	4		2	



3+3



2+2



2



1+2



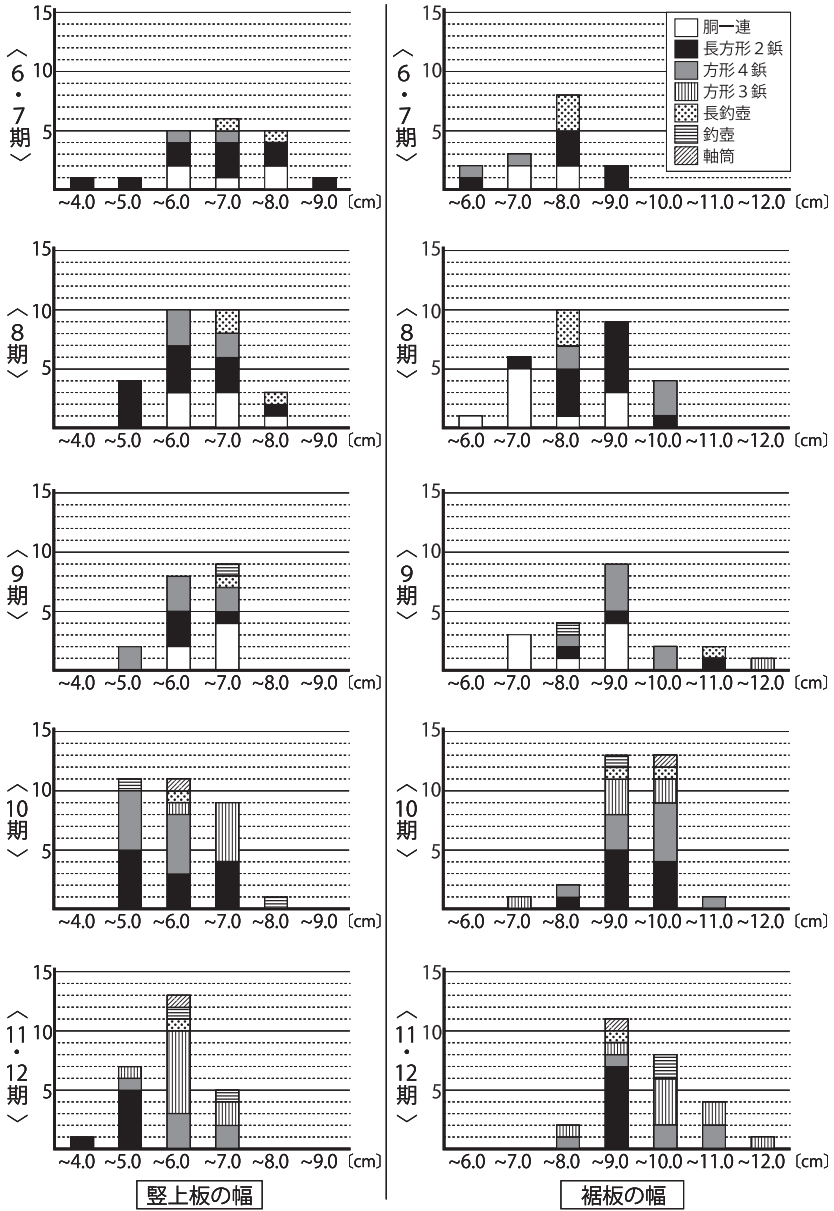
1+1



1

こうした系統ごとの違いは前胴壁上板や後胴裾板などの部材の大きさにも表れる。第5図は各系統の前胴壁上板と後胴裾板の幅を各段階ごとに示したものである^⑨。豎上板の幅では、6期から8期にかけては全体として系統ごとの差はほとんどみられない。しかし、9期になると胴一連系統はやや大型の六×七cmが中心に、長方形2鉾系統と方形4鉾系統ではやや小型の五×六cmが中心になり、系統ごとの差がみられるようになる。10期には胴一連系統はみられなくなるが、新たに出現する方形3鉾系統は六×七cmのやや大型のものを中心とする。11期・12期では方形4鉾系統・方形3鉾系統は五×六cmのやや大型のものを中心とする一方で、長方形2鉾系統は五cm以下にまとまるなど、明確な系統ごとの差が現れる。また、全期間を通じてみれば漸次的に豎上板幅が徐々に小さくなるが、特に長方形2鉾系統の小型化傾向が顕著で、各系統で変化のあり方が異なることがわかる。

後胴裾板幅では、6期・7期には系統ごとの差は見出しにくい。8期・9期にかけて胴一連系統が全体として七cm以下を中心に九cm以下までのやや小型のものにまとまる傾向をみせる。10期には長方形2鉾系統の中心は八×九cmに、方形4鉾系統の中心は九×一〇cmになり、わずかだが両系統の差がみられるようになる。11期・12期にはそうした傾向はより明確になり長方形2鉾系統は八×九cmに集中し、方形4鉾系統や方形3鉾系統はそれ以上のものが中心となる。全期間を通じてみれば漸次的に裾板幅が大きくなるが、胴一連系統ではほとんど変化がみられず、一方で方形4鉾系統では大型化の傾向が著しいという、各系統での変化のあり方の違いが認められる。



第5図 各期における縦上板と裾板の幅

竪上板と楯板の大きさからは、どちらも全体として変化の方向は一致するものの各系統で変化のあり方や変化幅に違いがあることがわかる。それにより、当初は各系統での差は明確でないが、徐々に差が大きくなり、9期ないし10期には各系統の違いが顕著になり、最終の11期・12期には系統ごとの違いが明瞭に認められるようになるのである。当初は共通するが徐々に違いが顕在化するというあり方は、9期から10期相当段階の前胴竪上3段鋳数である「1+2」の現れ方の顕著な違いとも共通する様相といえる。

鋳の使用数や部材の大きさの違いは、製作手法や使用する部材の規格が違うことを意味する。こうした違いは各系統の短甲生産がそれぞれ異なる単位で行われた可能性を示すが、特にこうした違いが徐々に大きくなることは、同一の系統から派生しつつも工人の交流など情報のやり取りが乏しいために徐々に形態や手法の差が大きくなったことを示していると考えられる。すなわち、各系統でそれぞれ生産体制が大きく異なるうえに一定程度関係性が断絶していることが想定できるわけだが、そうした点も先に示した頸甲や冑の相伴率の違いや特定系統の冑の組み合わせ状況と関連するのだろう。独自性の高い生産体制を持つ胴一連系統と長方形2鋳系統は、付属具の有無の点からしても独自性を持つのである。

一方で、付属具の相伴率の低さでは、方形3鋳系統も長方形2鋳系統とほぼ同様の傾向を示す。方形3鋳系統は小鉄板使用や鉄包覆輪の使用から、長方形2鋳系統をもとに派生した系統と考えられるが、部材の大きさは方形4鋳系統に近く、また金銅装の蝶番金具を使用する点は方形4鋳系統と同様である。こうしたことを考えれば、方形3鋳系統は長方形2鋳系統から派生したものの、方形4鋳系統と比較的近い、あるいは一体的な単位で生産されたと考えられる。方形3鋳系統の短甲は方形4鋳系統の短甲と近い生産体制の中に組み込まれるが、付属具と組み合わせることが多分に意図されていた方形4鋳系統と、同様の体制の中でも付属具と組み合わせられず短甲のみで流通することが企図されていた方形3鋳系統という理解が可能であろう。

9期・10期以降の長方形2鋳系統の様相は、方形3鋳・方形4鋳系統とは大きく異なる単位の下で生産が進められた可

能性を示している。それは、前段階とは異なり基本的に付属具生産を伴わないほぼ短甲だけに限った生産である。先述のとおり、部材の大きさ・規格が異なる点は部材の調達や準備から異なる体制下で進められたことを示しており、また、他系統も含め部材の規格の差が順次顕在化することは、各系統の生産体制がある程度没交渉状態にあったということを示している。もちろん、その前段階からすでに系統差は存在しているが、それがこの段階に及んでより顕在化するということであろう。長方形2鉾系統の短甲では、新しい段階になると豎上3段の帯金を欠く前胴六段構成という特徴をもつものが多くみられるようになるが、そうした点も各系統が異なる単位で生産されることで徐々に型式的な差が大きくなり、最終的には段構成の違いにまで及ぶようになったということを示している。

一方で、方形3鉾系統と方形4鉾系統は相対的に近いあり方を示す。また、吉村和昭が明らかにしたように、方形3鉾系統のものと方形4鉾系統のものには、地板の細部形態までもが一致する事例があり、「型紙」の共有のような事象として解釈されている。^①こうした現象も、両系統の生産体制としての近さを示しているのであろう。

4 武装としての格差

短甲の系統と付属具の関係を踏まえて、付属具の有無の意味はどのように理解できるであろうか。これまで単純に頸甲や冑を伴う場合、短甲だけの場合と比べて「格が高い」「あるいは高い評価を受けている」とされがちであったが、それらについても再検討が必要なはずである。

Ⅰ段階（1期～3期）…短甲だけの段階であり、付属具の有無での比較はできない。

Ⅱ段階（4期・5期）…4期には冑は存在するが数が限られており参照は難しい。基本的に「短甲のみ△短甲+頸甲」というのが付属具による格差づけの原則であろう。5期には冑の数が増加し、「短甲のみ△短甲+冑△短甲+頸甲+冑」という関係が明瞭になる。ただし4期・5期とも頸甲が伴うのは基本的に長方形革綴短甲で、冑の共伴率は短甲の形式差と

関係しないため「三角板革綴短甲 \wedge 長方板革綴短甲」という格差も想定できる。短甲の形式差が付属具の有無にも関係し、その上に「短甲（+冑） \wedge 短甲+頸甲（+冑）」という格差が存在する。

Ⅲ段階（6期・7期）…長方板革綴短甲がほぼみられなくなり、短甲の形式差による格差づけは消滅する。一部で冑のみを伴う事例があり、「短甲のみ \wedge 短甲+冑 \wedge 短甲+頸甲+冑」という格差がみられる。なお、当該段階は短甲の数に対し頸甲・冑の数が最も多い。

Ⅳ段階（8期・9期）…頸甲または冑のどちらか一方のみを伴う事例は限られ、付属具を伴う場合は頸甲と冑の両者をもつようになる。すなわち、「短甲のみ \wedge 短甲+頸甲+冑」という二段階の格差づけのみが存在することになる。付属具を伴う事例は胴一連系統の短甲が圧倒的に多く、胴一連系統の短甲が最上級に位置づけられていたとみることもできる。また、8期では付属具の共伴率からすると三角板鋳留短甲が上位、横矧板鋳留短甲が下位に位置づけられている。ただし、横矧板鋳留短甲は導入当初は三角板鋳留短甲よりも下位に位置づけられているが、やがて9期には両者の格差は消滅するようである。

Ⅴ段階（10期～12期）…Ⅳ段階と同様に、「短甲のみ \wedge 短甲+頸甲+冑」という二段階の格差づけのみが想定できる。ただし、付属具の数が非常に少なく大半で短甲のみの事例となる点は大きく異なる。

長方板革綴短甲と三角板革綴短甲は一定の格差づけがなされていたが、一方で両形式の形式的な変化の方向性は一致するため、両者の違いは同一の生産体制内での「格差づけを企図した作り分け」によるものと考えられる。その中で、前段階の方形板革綴短甲からの流れをくむ長方板革綴短甲が上位に、新たに採用された三角板革綴短甲が下位に位置づけられ、両者が統一的な体制のもとで管理されたといえる。そうした格差の存在は、長方板革綴短甲が消滅するⅢ段階にかけても「短甲形式としての格差」が消滅しただけで、付属具の有無での格差づけには変更はみられない。

8期には新式の横矧板鋳留短甲が付属具の有無で三角板鋳留短甲よりも下位に位置づけられており、長方板革綴短甲か

ら三角板革綴・鉾留短甲、そして横刃板鉾留短甲へと、新たな形式の短甲の採用に際しては、前段階から存在する短甲が上位に、新たに導入されたものは下位に位置づけられていく。胴一連系統の短甲の付属具との共伴率が高いのも、構造上最も古式である点が関係するのかもしれない。一定の数が知られる系統のうち最も新しい系統である方形3鉾系統が、方形4鉾系統と近い生産体制の中で生産されたにも関わらず付属具の共伴率が低いのも、新しいものをより下位に位置づけるといふ現象の現れの中で評価できる可能性がある。

Ⅳ段階・Ⅴ段階には格差づけの原理は「短甲のみ」か「頸甲と胄をもつ」という両者に集約される。また、Ⅳ段階には胴一連系統の短甲に、Ⅴ段階には数量は限られるが方形4鉾系統の短甲に付属具が伴う事例が多く、相対的に高い格が与えられていたとも考えられる。しかし、特にⅤ段階には方形4鉾系統の短甲には付属具が伴わない事例も多く、方形4鉾系統の短甲が高い位置づけを与えられていたのではなく、方形4鉾系統の短甲の生産を担った組織が付属具の生産も担っており、その中で付属具の有無という格差づけがなされたと考える方が妥当であろう。

- ① 藤田和尊 一九八八 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」(前掲)。
- ② 小林行雄 一九六五 「神功・応神紀の時代」『朝鮮学報』第三六輯 朝鮮学会 二五―四七頁、小林謙一 一九七四 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上)」「(下)」(前掲)、小林謙一 一九七五 「弓矢と甲冑の変遷」『古代史発掘』第六卷 講談社 九八―一〇二頁、古谷 毅 一九九六 「古墳時代甲冑研究の方法と課題」(前掲)、橋本達也 二〇〇五 「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論」松林山古墳と津堂城山古墳から―『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念』 大阪大学考古学友の会 五三九―五五六頁など。
- ③ 島内七六号地下式横穴墓例。組み合う胄は上接2式の三角板革綴衝角付胄であり型式的には圧倒的に古相で、製作段階が大きく異なる。
- ④ 11期の方形3鉾系統の短甲のうち、マロ塚古墳では同古墳出土として衝角付胄一点、眉庇付胄二点、頸甲三点が知られている。型的に同時期として問題ないものも含まれており、出土時の組み合わせや他の短甲の状況は不明だが、いずれかの胄や頸甲は実際には組み合うと考えられる。江田船山古墳でも衝角付胄の出土が知られるが、方形4鉾系統の2号短甲も出土しておりどちらに伴うか不明である。
- ⑤ 押付板や裾板の端部から身体を保護するためになされる覆輪技法には革組覆輪・革包覆輪・鉄包覆輪・鉄折覆輪の四つの技法がある。小鉄板使用は通常一枚の鉄板が配置される部位に別の小型の鉄板を充てることと部材を構成する手法のこと。使用される覆輪技法は蝶番金具

の形態差と明確な相関性があり、また、小鉄板使用の短甲は長方形2鉾系統と方形3鉾系統の短甲に集中してみられるなど、どちらも短甲の系統的なまとまりを反映する属性である。滝沢 誠 二〇〇八 『古墳時代中期における短甲の同工品に関する基礎的研究』(前掲)、川畑 純 二〇一五 『武器が語る古代史―古墳時代社会の構造転換』(前掲)。

⑥ 左右の前胴で豎上3段に使用する鉾数が異なる場合、鉾数の多い方を採用した。第4表中で豎上3段鉾数の項目に括弧付で二つの鉾数が記載されているものが該当する。

⑦ 前胴豎上3段の帯金に使用する鉾数の減少は、鉾留短甲全体における少鉾化現象と同根の現象といえる。吉村和昭 一九八八 『短甲系譜試論―鉾留技法導入以後を中心として』(前掲)、滝沢 誠 一九

九一 『鉾留短甲の編年』(前掲)、川畑 純 二〇一六 『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究』(前掲)。

⑧ 花野井大塚古墳例。ただし、花野井大塚古墳例は短甲の遺存状態がやや悪く、豎上3段の鉾数は復元的に理解したもので、やや確度は低い。それを除けば、長方形2鉾系統には「1+2」となるものは確認できないことになる。

⑨ 豎上板の幅は引合板との接点、裾板の幅は後胴側中心部を計測した。ただし、当該部位が破損している場合はこの限りでない。

⑩ 川畑 純 二〇一五 『武器が語る古代史―古墳時代社会の構造転換』(前掲)。

⑪ 吉村和昭 二〇一四 『三次元レーザー計測を利用した古墳時代甲冑製作の復元的研究』(前掲)。

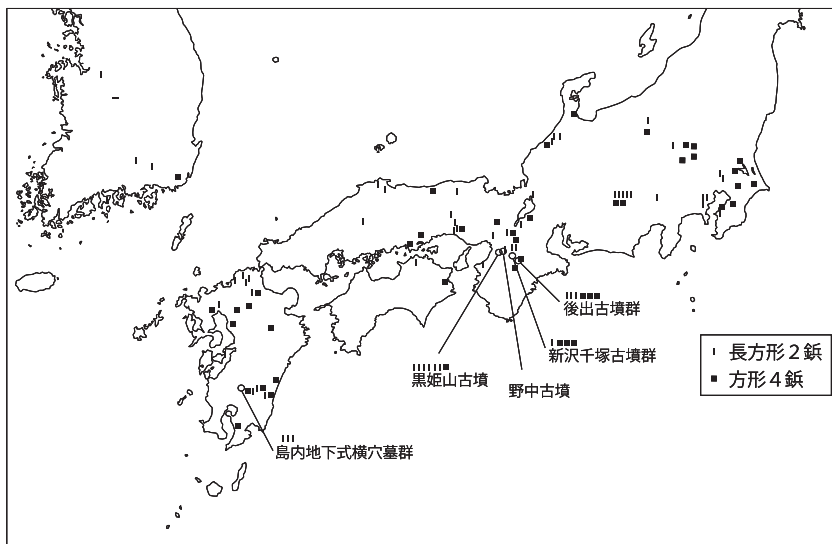
第五章 甲冑の流通

1 短甲系統の分布

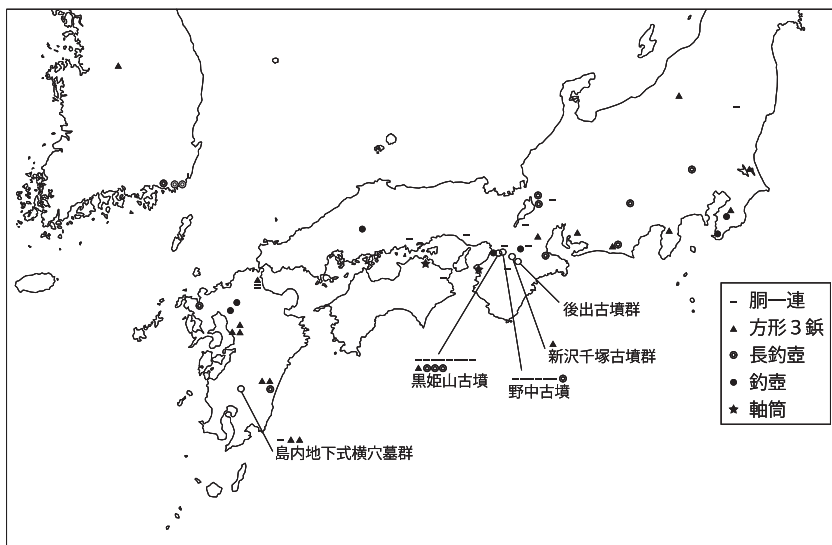
続いて各系統の分布を検討することで、こうした系統差の意味を考えたい。第6図は各系統の短甲の分布を示したものである。出土例の多い長方形2鉾系統・方形4鉾系統と、相対的に少ないその他の系統に分けて示している。いずれもすべての時期のものをまとめて提示しており、また、詳細な出土古墳が確定できないものについても、出土した古墳群等が判明している場合は提示している。

全国的な傾向として、胴一連系統の近畿地方を中心とした偏在が認められる。特に、野中古墳と黒姫山古墳への一括副葬が圧倒的であるが、それを除いても福島県の四穂田古墳や宮崎県の島内三号地下式横穴墓という遠隔地からの出土例が

長方形2 鈺・方形4 鈺



胴一連・方形3 鈺・長釣壺・釣壺・筒軸



第6図 各系統の短甲の分布

あるものの、他地域での副葬は限定的である。また、長釣壺系統のものは宮崎県の伝・六野原地式横穴墓群や佐賀県の夏崎古墳の出土事例があるが、近畿以東に偏在する傾向が強い。

これら広域的な分布の違いはやや緩やかなものであるが、より微視的にみれば特定の系統が特定地域に集中することがわかる。長方形2鉾系統では、千葉県北西部から東京都、神奈川県東部にかけてや、長野県飯田市域、兵庫県姫路市周辺、福岡県北西部の筑前・筑豊地域^④にまとまりがみられる。

こうした長方形2鉾系統の特定地域への分布は、方形4鉾系統との比較によりさらに明確になる。千葉県北西部から東京都・神奈川県長方形2鉾系統の集中に対し、茨城県南部から千葉県には方形4鉾系統が集中する^⑤。福岡県北西部の筑前・筑豊地域への長方形2鉾系統の集中に対しては、福岡県南部の筑後地域から熊本県北部に方形4鉾系統が集中する^⑥。他にも、方形4鉾系統は群馬県南部と埼玉県北西部の伊勢崎市・高崎市・本庄市に集中する^⑦。

数は限られるが、他の系統でも特定地域への集中がみられる場合もある。熊本県玉名市から熊本市北部には方形3鉾系統が集中する^⑧。韓国釜山市域では長釣壺系統が集中するが、釜山市域のこれらの事例以外は韓国では長方形2鉾系統が多く、顕著な違いといえる。この他にも2点程度のまとまりが認められる事例は各所にあり、資料点数が増えればよりこうした集中傾向が顕著になる可能性もある。

なお、方形4鉾系統と方形3鉾系統は互いに生産単位として近いあり方をしていたと考えられるが、そうしたあり方は方形4鉾系統が集中する茨城県南部から千葉県にかけて方形3鉾系統が同様に含まれ、福岡県南部から熊本県北部では両系統が集中するとみることのできるなど、分布の面からも追認できる部分もある。宮城県東部も方形4鉾系統・方形3鉾系統がやや多い地域といえる。近畿地方においても黒姫山古墳では胴一連系統を主体としつつも長方形2鉾系統が一定数あり、方形4鉾・方形3鉾系統の数が非常に少ないのに対して、後出古墳群や新沢千塚古墳群では方形4鉾系統が過半を占めることなども、各系統の集中の一環として参照できるだろう。

2 分布の集中とその意味

このように短甲の系統には、特定の地域に集中し他系統とは一定のまとまりの違いをみせるものがある。特に数の多い長方形2鋳系統と方形4鋳系統・方形3鋳系統では明確な分布の違いを示す地域が存在する。もちろん、複数の系統が同一地域さらには一古墳群や一古墳内で共存することも多く、各系統の分布はそれぞれ完全に排他的なものではないが、こうした分布の違いは、これまでに示してきた各系統の型式的特徴や付属具の組み合わせといった違いが、分布の面、すなわち流通の段階にも及ぶことを示している。

短甲の各系統はそれぞれ独自性の高い単位で生産されていたことはこれまでに示してきたが、こうした分布の状況は、系統差として認識される生産時の単位が流通時にも維持されたことで、特定の地域に特定の系統の短甲がもたらされたことを示している。生産の単位はそのまま流通の単位でもあったのであり、生産の当初から流通に至るまで生産組織が関与できる工程全てがある程度独立した閉じられた体制の中で行われていたと考えられる。当然そうした体制の違いは生産の場・一時的な集積の場などの物理的な生産場所の違いを伴っていたであろう。であるならば、こうしたある程度閉じられた単位で行われた生産や流通を担ったのは、一つの「工房」としてのまとまりに相当する製作集団であったと考えられる。すなわち、胴一連系統、長方形2鋳系統、方形4鋳系統と方形3鋳系統として顕在化した甲冑の違いはそれぞれが生産された「工房」の違いにより生じたものであったといえる。Ⅰ段階・Ⅱ段階には甲冑の系統分化はみられず形式差と格差づけが対応するなど当初は一元的な体制の下で生産・管理されていたが、Ⅲ段階における鋳留短甲の成立とともに系統分化すなわち異なる「工房」での生産が開始され、相互の交流が限定的であったため徐々に規格性や手法的な同一性を失い、Ⅴ段階には部材の大きさや製作時の諸特徴が明確に異なるようになったのであろう。

こうした工房に相当するような生産の単位が流通の単位にも一致する状況というのは、甲冑の生産主体側からみた評価

であるが、一方で甲冑を副葬した各地の古墳の被葬者側から考えれば、また異なる評価ができる。特定の系統の短甲を副葬したある特定の地域は、その地域を勢力基盤とする地域の有力集団が勢力範囲としていたと考えられるが、であるならばそうした特定の地域への特定系統の短甲の集中は、地域の有力集団が特定の甲冑の製作集団と結びついており、その関係性に基づいて甲冑を入手したということを示している。

甲冑の素材となる鉄は当該時期には日本列島内では生産されておらず、基本的に朝鮮半島からの輸入に頼っていたと考えられる^⑪。であるならば、甲冑を製作した工人集団がそれぞれ独自に朝鮮半島と交易し素材を入手していたことを想定するのは難しいだろう。それぞれの工人集団を所管するより上位の集団・組織が存在し、素材の入手や製品の流通といった他の組織との関係の調整を図っていたと考える方が合理的である。とすれば、こうした甲冑の分布は、特定の甲冑の生産と流通を掌握する上位の集団が結びついていた地域の違いを反映しているということになる。翻って考えれば、特定の甲冑の生産と流通を掌握する上位の集団は各地域と結びつきをもっており、その結びつきに基づいて特定の地域に特定の系統の甲冑が多くもたらされたのである。

- ① 花野井大塚古墳、金塚古墳、御嶽山古墳、朝光寺原古墳。
 ② 塚原一一号墳、塚原古墳群（開善寺旧蔵）、権現三号墳、溝口の塚古墳。
 ③ 奥山二号墳、宮山古墳、法花堂二号墳、安黒御山五号墳。なお、姫路市周辺の事例では、姫路市から市川を北上すれば豊岡市域に至るため、豊岡市の小山一号墳も同様に含めることができるかもしれない。
 ④ 永浦四号墳、高九一〇号墳、かつて塚古墳、セスドノ古墳。
 ⑤ 武具八幡古墳、船塚山一七号墳、布野台A区埋葬施設、鳥山二号墳、野焼二号墳。
 ⑥ 塚堂古墳、真浄寺二号墳、江田船山古墳。
- ⑦ 本関五号墳、鶴山古墳、中原古墳、生野山古墳。
 ⑧ 伝佐山古墳、マロ塚古墳、江田船山古墳。
 ⑨ 蓮山洞8号墳、伝蓮山洞、加達4号墳。
 ⑩ ここでは「工房」とするが、単独の建物で構成されるようなものから、それぞれ異なる役割を持つことも想定できる複数の建物からなり、多数の工人が生産にあたるような体制まで様々な形態を想定して「工房」と呼称する。ただし、生産「工房」の実態の検討は今後の課題である。
- ⑪ 村上恭通 一九九八 『倭人と鉄の考古学』 青木書店など。

ここまでの検討により、当初は特定上位層のみが鉄製甲冑を保有・副葬していたが、順次その下位の位置づけを与えられる形で新たな形式や系統が導入されていくこと、Ⅲ段階における鋳留技法の導入を境にいくつかの生産「工房」へと生産体制が分化し、それぞれ付属具の組み合わせや流通先を異にしつつ各工房とそれを掌握する上位集団の意図の下、地域との関係の中である程度独立的に甲冑の授受を行う体制が確立されていくことが明らかになった。

Ⅳ段階の胴一連系統の生産終了までは、甲冑の生産体制の中で全体を貫く格差づけの論理が少なからず機能していたと考えられる。それは甲冑全体の出土点数と付属具の共伴率で他地域に対して卓越する近畿地方の倭王権が、一定の階層化原理を組み込みつつその周辺地域や各地の有力者との関係を構築していった姿と読み解くことができる。そうした生産・流通体制は鋳留技法導入期に金銅の技術を持つ金工工人を中心に新来の渡来系工人集団を巻き込む形で再編され、生産工房の分化と複数の集団による分掌体制への移行により生産量の増加が図られるが、新形式の甲冑を旧来的な甲冑より下位に位置づけることで、甲冑の配布者と旧来的な保有層、そして新たな保有層を一元的に格差づけるという目的は一定程度果たされていた。しかし、複数工房による多元的な生産は、結果として各集団による独自の付属具の構成原理を生み出し、また甲冑生産を掌握する各集団が地域と独自に関係性を構築する動きへと展開するなど、一元的な関係性の構築や格差づけの論理の崩壊へとつながっていった。

これまでの甲冑を素材とした古墳時代の軍事組織研究においては、長方板革綴短甲と三角板革綴短甲の導入や鋳留技法の導入により生産量が増大し、それに伴い地域の中小古墳からの出土量が増大することから、徐々に地域の大首長を介した間接的な関係の構築から中小首長層の直接的な掌握へと倭王権と各地の関係は移行したとする考えが示されてきた。本稿での分析によれば、新たに導入される各形式・系統の短甲は既存の甲冑に対して下位に位置づけられており、新形式の

導入と生産量の増大、中小古墳からの出土比率の増大がそれまでの甲冑と同じ位置づけの中でなされたとは考え難い。生産量の増大と中小古墳被葬者への配布比率の増大方針は、最終的には複数の集団による甲冑生産と流通体制の確立へと至るが、それは結果としてそれらの集団の目的・自己論理に基づく生産と流通の差配を招くこととなった。そこでは当初企図された甲冑を用いた地域の有力者との一元的な関係の構築戦略はすでに変質していたと考えられる。

このように考えると、Ⅳ・Ⅴ段階における中小古墳からの甲冑出土を、地域の中小首長が倭王権の軍事機構に直接的に編入された証として単純に評価することはできない。それは、甲冑の生産と流通を分掌した倭王権を構成するいくつかの有力集団が各地域と結びついた姿の反映である。むしろそうした倭王権を構成するいくつかの集団が、自集団の利益追求のためにそれぞれ競い合うように各地域との関係の構築を試みた結果が、各地の中小古墳からの甲冑出土量増大の実態であったと考えられる。そうした動きの総体が、王権による全国各地への影響の実体であったのだろう。

ちなみに前稿では、同一の埋葬施設から複数の甲冑が出土した場合、より古相の甲冑の方が副葬位置においてもより高い位置づけが与えられていたことを明らかにした。こうした現象は、古相の甲冑をより上位に、新相の甲冑をより下位に位置づけて格差づけを進めていった甲冑の配布主体である倭王権側の論理を、甲冑の受領者または甲冑を古墳に副葬した葬送行為の実施者が受け入れていたことを示している。甲冑の受領者も倭王権による格差づけを知ったうえで、その位置づけを受け入れ、その役割を果たしたということであろう。

① 橋本達也 一九九五 「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義―眉庇付冑を中心として―」（前掲）、阪口英毅 二〇〇八

「いわゆる「鈺留技法導入期」の評価」『古代武器研究』第九号 古

代武器研究会 三一一―五一頁など。

② 藤田和尊 一九八八 「古墳時代における武器・武具保有形態の変

遷」（前掲）、滝沢 誠 一九九四 「甲冑出土古墳からみた古墳時代前・中期の軍事編成」（前掲）。

③ 川畑 純 二〇一六 『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱
いの研究』（前掲）。

第七章 おわりに

倭王権による一元的な生産と配布が論じられてきた古墳時代の鉄製甲冑について、その生産が最終的には複数の有力集団により担われること、そしてそれぞれの集団が独自に地域の集団と結びつき甲冑の授受を果たしたことを示した。ただし、こうした多元的な生産と配布体制とはいっても、あくまでそれは倭王権を構成する有力集団が担ったものであり、その意味では倭王権による「一元的な」生産・配布体制の内実が複数の集団による分掌であったということかもしれない。

こうした複数の工房・集団による甲冑の生産と配布はあくまで甲冑自体の検討によるもので、実際の生産遺跡は未だ不明である。ただ、中期中葉頃（五世紀前葉～中葉ごろ）は大阪府の柏原市大泉遺跡や交野市森遺跡など後の畿内地域各地で大規模鍛冶工房が操業を行い、倭王権の領域内に各種器物の生産拠点が配置される時期にあたる^①。中期中葉は甲冑の系統分化が生じる段階で、両者の時期的な符合は注目できる。明確な根拠は提示できないが、いくつかの大規模鍛冶工房が甲冑生産を担った可能性を想定したい。なお、時期的には中期初頭から前葉とややずれるが、奈良県御所市の南郷遺跡群では鉄製品だけでなく金工品も生産されており、金工品も生産しうる工房とそうした技術を持たない工房という多様な工房の在り方を想定すれば、特定系統の甲冑にだけ金銅装のものが集中するという点も理解しやすい。

中期の鍛冶関連遺跡には、大泉遺跡や森遺跡など大王直営とされるものと、南郷遺跡群や天理市布留遺跡など地域の有力集団経営とされるものがあり、いくつかの性格の違いが指摘される^③。刀剣等は装具未製品の出土から各所での生産が想定されてきたが、倭王権による一元的生産が想定されてきた甲冑については、大泉遺跡など大王直営工房での極めて限定的な生産であるのか、それとも南郷遺跡群などでも生産しえたのかについては、工房の経営主体と製品について複数の見解が示されてきた^④。これらの見解の違いは、甲冑の型的な分析と鍛冶関連遺跡の実態という異なる視点をいかに整合するかという点によるものだが、本稿での分析により畿内地域各所の鍛冶関連遺跡において、地域の有力集団がそれぞれ甲

胄生産を担ったと考える事も可能となった。本稿で示した分布の実態は、畿内地域の有力集団がそれぞれの論理に基づき各地の有力者と武器の授受を伴う関係を構築した姿の一端を示していると考えられる事もできるのである。また、畿内各地の鍛冶関連遺跡については後に「氏族」として認識される有力集団との関係が論じられるものもあり、こうした有力集団による武器生産と授受のあり方は、氏族の成立とそのあり方の前史として理解することもできる。

倭王権の動向を知る上でも注目され、詳細な型式的研究が進められてきた鉄製甲冑であるが、その内包する情報は膨大で、まだまだ詳細な分析の余地は多い。近年進展している部材形態の一致や同工品の有無など甲冑生産の小単位を明らかにしうる研究については、本稿で示した工房の想定は是非を検討しうる視点といえる。あるいはそうしたさらなる細部の分析によって各工房における生産の実態を明らかにできる可能性もある。まだまだ課題は多いが、もとより不十分な点の多い本稿からの展望として提示しておきたい。

- ① 花田勝弘 二〇〇二 『古代の鉄生産と渡来人―倭政権の形成と生産組織―』 雄山閣、菱田哲郎 二〇〇七 『古代日本 国家形成の考古学』 京都大学学術出版会。
- ② 坂 靖(編) 一九九六 『南郷遺跡群Ⅰ』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第六九冊 奈良県立橿原考古学研究所。
- ③ 花田勝広 一九八九 「倭政権と鍛冶工房―畿内の鍛冶專業集落を中心として―」『考古学研究』三六―三三 考古学研究会 六七―七九頁、坂 靖 一九九八 「古墳時代における大和の鍛冶集団」『橿原考古学研究所論集』一三 吉川弘文館 三一―五五頁、花田勝広 二〇一二 「鍛冶と製鉄」『講座日本の考古学』八 古墳時代(下) 青木書店 九九―一二三頁、坂 靖 二〇一三 「古墳時代中期の遺跡構造と渡来系集団」『古代学研究』一九九 古代学研究会 九一―一六頁など。
- ④ 大和遺跡を中心とする極めて限定的な工房における甲冑生産を想定する立場として、橋本達也 二〇一五 「古墳時代中期の武器・武器生産」『中期古墳とその時代 五世紀の倭王権を考える』季刊考古学・別冊二二 雄山閣 九九―一〇頁など。南郷遺跡群における甲冑生産を認める立場として、坂 靖 一九九八 「古墳時代における大和の鍛冶集団」(前掲)、内山敏行 二〇〇八 「古墳時代の武器生産―古墳時代中期甲冑の二系統を中心に―」(前掲)、鈴木一有 二〇一二 「武器・武器」『古墳時代研究の現状と課題』下 同成社 一〇七―一二七頁など。

図版出版

第1図 末永一九三四をもとに作成。その他の挿図・挿表は筆者作成。

(文化庁文化財部記念物課)

第4表 検討対象甲冑一覧

時期	古墳名	開閉構造・ 線番金具	地板形式	連接技法	竪上板	押付板	裾板	竪上3段 銀数	組み合わせ甲冑		
									衝角付冑	盾庇付冑	頭甲
1	大丸山	胴一	堅矧	革綴	—	—	—	—			
	紫金山	胴一	堅矧	革綴	—	—	—	—			
	奥の前1号	胴一	堅矧	革綴	—	—	—	—			
	雨の宮1号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	安土瓢箪山	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	園部垣内	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	瓦谷1号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	上殿 南小口	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	新沢500号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	鴨都波1号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	若八幡宮	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
2	船来山98号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	中山B-1号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	タニグチ1号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	稲童15号	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
	熊本山	胴一	方形	革綴	—	—	—	—			
上殿 北小口	胴一	方形(襟)	革綴	—	—	—	—				
3	石山 東櫛	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	鞍岡山3号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	池ノ内5号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	古郡家1号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	鋤崎	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
4	野毛大塚	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	三革/横		1
	柴垣円山1号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			1
	龍門寺1号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			○
	新開1号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			1
	豊中大塚 1号短甲	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			1
	天神山1号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			2
	佐野八幡山	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/横		
	谷内21号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—			1
	和泉黄金塚 東櫛	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/欠		1
	新沢508号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—			
福泉洞4号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—				
豊中大塚 3号短甲	胴一	三角(襟)	革綴	—	—	—	—	三革/横		—	
交野東車塚	胴一	三角(襟)	革綴	—	—	—	—	三革/横		—	
5	桜ヶ丘	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	三革		4or5
	谷内21号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	天神山7号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	竪A革/上1		2
	わき塚1号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	三革/横		1
	宇治二子山北	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	三革/上2		2
	茶すり山	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	三革/横		2
	小野王塚	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	岬	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	浄土寺山	胴一	長方	革綴	—	—	—	—		特殊	
	蓮山洞8号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			○
	雁洞	胴一	長方	革綴	—	—	—	—	無A・三A2		○
	向山1号 1号短甲	胴一	三角	革綴	—	—	—	—			
	亀塚	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/上2		1
	五ヶ山B2号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/横		1
	私市円山 第2主体	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/上2		
	山中田1号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—			
	唐塚	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/上2		
	壺山1号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/上2		
	心合寺山	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/上2		
	井手ノ上	胴一	三角	革綴	—	—	—	—	三革/上2		
道項里13号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—				
玉田68号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—				
豊中大塚 2号短甲	胴一	三角(襟)	革綴	—	—	—	—	三革/上2		—	
野中 9号短甲	胴一	三角(襟)	革綴	—	—	—	—	(革製)		—	
百舌鳥大塚山	胴一	三角(襟)	革綴	—	—	—	—	三革/上1		—	
6	鶴山	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	向山1号 3号短甲	胴一	長方	革綴	—	—	—	—			
	兵冢12号	胴一	長方	革綴	—	—	—	—		無A	2
	長瀬西	胴一	三角	革綴	—	—	—	—			
倉科將軍塚2号	胴一	三角	革綴	—	—	—	—				

古墳時代甲冑の系統と授受 (川畑)

時期	古墳名	開閉構造・ 鍔番金具	地板形式	連接技法	堅上板			堅上3段 鉄数	組み合わせ甲冑				
					押付板	裾板			衝角付冑	肩庇付冑	頸甲		
6	下開筭茶白山9号	胴一	三角	革綴					堅A革/上2				
	向山1号 2号短甲	胴一	三角	革綴									
	文殊堂11号	胴一	三角	革綴									
	千人塚	胴一	三角	革綴					三革/上2				
	新開1号	胴一	三角	革綴						無A	5		
	ニゴレ	胴一	三角	革綴					小革/		3z		
	私市円山 第1主体	胴一	三角	革綴					三革/上3		4		
	岸ヶ前2号	胴一	三角	革綴					小鉄/上3		3		
	青塚	胴一	三角	革綴					横鉄/内2		○		
	御獅子塚 第2主体	胴一	三角	革綴						三B2	5		
	鞍塚	胴一	三角	革綴					三鉄/上内		4		
	年ノ神6号	胴一	三角	革綴							3		
	ベンショ塚	胴一	三角	革綴						無A			
	新沢139号	胴一	三角	革綴						三B2	4		
	高山1号 短甲1	胴一	三角	革綴									
	原間6号	胴一	三角	革綴							4		
	老司 2号石室	胴一	三角	革綴									
	堤当正寺	胴一	三角	革綴					小鉄/上3		4		
	汐井川2号	胴一	三角	革綴									
	ペノルリ3号	胴一	三角	革綴					三鉄/上3				
	野暮	胴一	三角	革綴					三革/内?		4		
	七観	胴一	変形	革綴					(革製)		○		
	野中 8号短甲	胴一	三角(襟)	革綴					(革製)		—		
	野中 10号短甲	胴一	三角(襟)	革綴					(革製)		—		
茶すり山	胴一	三角(襟)	革綴					堅鉄/上2		—			
珠金塚 南櫛	長1	三角	鉄留	7.5	8.9		3+3	三鉄/上2		○			
永浦4号	長2	三角	鉄留	6.9	10.4	8.4	2+3(2+4)		無A	3			
新開1号	長2	変形	鉄留	5.0	7.2	5.7	特殊	三革/上2					
西分円山	長2	変形	鉄留				特殊	三鉄/上2		○			
7	二本松山	胴一	三角	鉄留	7.2	10.1	7.3	3			三B3	5	
	新開1号	胴一	三角	鉄留	6.8	10.0	6.5	3+4			葉B1・三A1		
	珠金塚 北櫛	胴一	三角	鉄留	5.7	9.3	6.6	3+3					
	惠解山1号	胴一	三角	鉄留	7.2	11.6	欠	3+3	堅A鉄/上内			4or5	
	稲笠21号	胴一	三角	鉄留	5.1	9.1	7.9	2+2			LB1	3z	
	八重原1号 2号短甲	長2	三角	鉄留	5.4	欠	欠	3+3					
	朝光寺原1号	長2	三角	鉄留	7.0	10.0	7.3	欠			葉B		
	和田山5号 A櫛	長2	三角	鉄留	6.1	9.8	欠	4+4			三A2	1z	
	林畔1号	長2	三角	鉄留	8.0	11.1	欠	欠					
	宮山	長2	三角	鉄留				2+2?	横鉄/上下			5	
	小山1号	長2	三角	鉄留	9.0	11.5	7.3	欠+3					
	下北方5号	(長2)	三角	鉄留	4.0	10.4	8.4	4+4			三A2	3?	
	西小山 短甲1号	長2	三・横	鉄留				2+3?			葉A	○	
	御獅子塚 第1主体	長2	三(多)	鉄留	6.0	11.0	7.8	4+3?	小鉄/上内			5	
	坊主塚	方4(金)	三角	鉄留	6.2	11.9	6.3	2+2	横鉄/外			5	
	市尾今田1号	方4	三鉄	鉄留	5.2	9.8	5.9	2+2	小鉄/欠			○	
	野中 7号短甲	長釣	三角	鉄留	6.5	10.0	7.5	3+3			レA	4	
	黒姫山 6号短甲	長釣	三角	鉄留				7.6	3+3?			レ?	
	黒姫山 5号短甲	長釣	三角(襟)	鉄留	7.8	—	7.5	3+3			レ?		
	夏崎	長釣	変形	鉄留							葉B		
	8	四櫛田	胴一	三角	鉄留	欠	欠	8.3	3+3				
		中八幡	胴一	三角	鉄留	欠	9.4	欠	欠				
		随庵	胴一	三角	鉄留	7.0	10.6	8.0	2+2?	横鉄/内1			5
		野中 1号短甲	胴一	三角	鉄留	6.1	12.0	6.1	2+2			レB	5
野中 5号短甲		胴一	三角	鉄留	不明	9.9	7.0	不明			レA	5	
野中 6号短甲		胴一	三角	鉄留	欠	9.9	7.0	3+3			レB	4or5	
黒姫山 24号短甲		胴一	三角	鉄留	5.7	欠	6.6	2+欠			レA2	6	
小野王塚		胴一	三角	鉄留	7.5	10.6	8.7	2+2			三A1	5	
野中 2号短甲		胴一	横刺	鉄留	5.2	11.8	6.9	2+2			レA	4or5	
野中 4号短甲		胴一	横刺	鉄留	6.1	10.4	5.2	3+3			レB	4or5	
稲笠21号		胴一	横刺	鉄留	5.8	11.2	8.2	2+2					
溝口の塚		(長2)	三角	鉄留	5.1	9.5	6.8	2+2	横鉄/内3			5	
法花堂2号		長2	三角	鉄留	6.9	9.7	9.1	2+2	小鉄/上3			5	
円照寺墓山1号短甲		長2	三角	鉄留	6.2	10.2	7.3	2+2			甲冑組み合わせ不明		
後出7号		長2	三角	鉄留	6.9	13.0	8.6	2+2					
新沢115号		長2	三角	鉄留	6.0	10.1	7.7	3+3(2+2)	小鉄/内2			4z	
宇治二子山南 1号短甲	長2	三・横	鉄留	7.1	11.8	8.7	2+2				6a		

時期	古墳名	開閉構造・ 鍍着金具	地板形式	連接技法	竪上板	押付板	裾板	竪上3段 級数	組み合わせ甲冑			
									衝角付冑	眉庇付冑	頸甲	
8	若田大塚	長2	横刳	鉋留	4.4	11.1	8.0	2+2				
	黒姫山 21号短甲	長2	横刳	鉋留	4.4	11.6	8.2	2+欠	横鉋		6	
	後出2号 短甲1	長2	横刳	鉋留	5.0	12.1	8.8	2+2(1+3?)				
	月坂放し山5号	長2	横刳	鉋留	4.7	11.3	8.0	2+2				
	岡の御堂1号	長2	横刳	鉋留	4.2	11.5	9.0	2+2				
	六野原10号	長2	横刳	鉋留				欠		レA2		
	小木原3号地下式	長2	横刳	鉋留	5.3	10.3	8.7	2+2				
	島内62号	長2	横刳	鉋留	5.1	11.1	9.0	2+2				
	倭文6号	方4	三角	鉋留				3+3	横鉋/外		小札頸甲	
	後出3号 第2主体	方4	三・横	鉋留	5.3	10.1	7.8	1+1				
	舟塚山17号	方4	横刳	鉋留								
	宇治二子山南 2号短甲	方4	横刳	鉋留	5.9	14.8	9.5	2+2	横鉋/外		6a	
	後出2号 短甲3	方4	横刳	鉋留	6.6	12.4	7.4	2+2				
	真浄寺2号 2号短甲	方4(金)	横刳	鉋留	5.1	13.0	9.1	2+2				
	下北方5号	方4	横刳	鉋留	6.5	13.0	10.0	1+2				
	東耕地3号	長約(特)	横刳	鉋留	6.8	13.6	7.9	2+2				
	小谷13号	長約	三角	鉋留	7.2	13.6	7.9	2+2				
	黒姫山 4号短甲	長約	三角	鉋留	6.6	8.3	8.0	3+3?		レA2	6	
	9	近代	胴一	三角	鉋留	6.2	12.2	8.5	2+2	三革/上3		○
		黒姫山 2号短甲	胴一	三角	鉋留	6.3	11.8	8.1	(2+2)1+2	横鉋/外		6
黒姫山 7号短甲		胴一	三角	鉋留	5.2	11.4	8.1	2+2		レ		
黒姫山 17号短甲		胴一	三角	鉋留				欠	横鉋/上下			
黒姫山 18号短甲		胴一	三角	鉋留	欠	欠	6.8	欠				
黒姫山 20号短甲		胴一	三角	鉋留	欠	欠	欠	欠	横鉋		○?	
五條塚山		胴一	三角	鉋留	5.4	10.0	6.5		横鉋		6a	
島内3号		胴一	三角	鉋留	6.8	10.0	7.2	1+1				
野中 3号短甲		胴一	横刳	鉋留	6.3	11.7	6.6	1+2?		レB	5	
黒姫山 19号短甲		胴一	横刳	鉋留	欠	欠	8.1	1+2	横鉋/外		6	
御藏山		長2	三角	鉋留	6.0	10.7	7.3	2+2				
円照寺墓山1号 2号短甲		長2	三角	鉋留	5.1	10.1	欠	2+2		甲冑組み合わせ不明		
御藏山		長2	横刳	鉋留	6.5	9.9	8.3	2+2?				
黒姫山 8号短甲		長2	横刳	鉋留		欠	欠	2+2?		○		
奥山2号		長2	横刳	鉋留	5.2	欠	10.3	1?				
上栢里		長2+方4	三角	鉋留				2+2				
左野山		方4	横刳	鉋留	5.6	13.0	9.0	(2+2)1+2				
布野台A区埋葬施設		方4	横刳	鉋留				2+2	横鉋/内		○	
イオダノヤマ3号		方4	横刳	鉋留	6.6	12.0	9.8	2+2				
塚原鏝塚		方4(金)	横刳	鉋留	5.5	10.0	8.6	1+2				
原山西手	方4	横刳	鉋留	4.5	10.5	9.0	2+2?	横鉋/内1		○		
亀山 1号主体	方4(金)	横刳	鉋留	5.3	10.0	7.9	欠		三C			
新沢109号	方4	横刳	鉋留	4.6	欠	8.7	1+1					
新沢173号	方4	横刳	鉋留	6.5	11.3	9.8	2+2					
飯綱山10号 短甲2	爪3	横刳	鉋留				2+2					
黒姫山 3号短甲	爪3	横刳	鉋留	欠	欠	11.6	2+2	横鉋/外		6		
雲雀山2号	長約	三角	鉋留	6.3	13.3	10.2	1+2					
加達4号	長約	三角	鉋留				2+2					
八重原1号 1号短甲	約	三・横	鉋留	6.2	9.8	8.0	1+1					
10	曲2号	長2	三・横	鉋留	4.8	11.0	9.3	1+1				
	校洞3号	長2	三・横	鉋留				2+2?				
	花野井大塚	長2	横刳	鉋留	6.7	12.5	8.8	1+2?				
	権現3号	長2	横刳	鉋留	4.5	10.4	8.6					
	塚原古墳群	長2	横刳	鉋留	4.1	欠	欠	1+1		甲冑組み合わせ不明		
	溝口の塚	長2	横刳	鉋留	5.7	11.9	8.5	2+2				
	八里向山F7号	長2	横刳	鉋留	5.9	11.9	8.7	2+2				
	黒田長山4号 南棺	長2	横刳	鉋留	6.2	12.8	9.1	2+2				
	黒姫山 23号短甲	長2	横刳	鉋留	6.7	欠	欠	1+1	○	レ?		
	後出2号 短甲2	長2	横刳	鉋留	4.1	10.8	8.0	1+1				
	かつて塚	長2	横刳	鉋留	6.6	11.0	9.5	2				
	長迫	長2	横刳	鉋留	4.8	11.7	9.3					
	玉田28号	長2	横刳	鉋留	5.3	12.1	8.3	2+2				
	鶴山 1号短甲	方4	横刳	鉋留	5.8	12.0	10.0	2+2	小鉋/外		5	
	狐山	方4	横刳	鉋留	5.0	11.5	9.2	1+2				
	月の木1号 1号木棺	方4	横刳	鉋留	4.4	11.9	10.1	2+2				
新沢281号	方4	横刳	鉋留	4.9	10.5	8.8	2+2?	小鉋/内2		6a		
池殿奥5号	方4	横刳	鉋留	5.8	11.9	8.4	1+1					

古墳時代甲冑の系統と授受（川畑）

時期	古墳名	開閉構造・ 蝶番金具	地板形式	連接技法	竪上板	押付板	裾板	竪上3段 鉄数	組み合わせ甲冑				
									衝角付冑	肩庇付冑	頸甲		
10	正崎2号	方4(金)	横刳	鋲留	5.0	11.1	9.0	1+2		小鋲		6b	
	稲童8号	方4(金)	横刳	鋲留	5.2	15.1	9.6	2+2		横鋲/内3			
	一の谷	方4	横刳	鋲留	6.0	12.3	9.2	2+2				○	
	六野原1号	方4	横刳	鋲留	5.6	12.6	9.4	欠					
	西都原4号 3号短甲	方4(金)	横刳	革綴	5.0	11.5	7.5	1+2?					
	林2号	方3	三・横	鋲留	6.4	11.9	9.4	1+2					
	東間部多1号	方3	横刳	鋲留	5.6	11.4	9.3	1+2					
	新沢510号	方3	横刳	鋲留	6.6	11.5	8.6	1+2					
	西都原4号 2号短甲	爪3	横刳	鋲留	6.1	12.0	9.0	2+2					
	鳥内76号	爪3	横刳	鋲留	6.3	13.0	8.9	2+2		三革/上2			
	望夷山城	爪3	横刳	鋲留	6.2	11.0	7.0	2+2(1+1)					
	黒田長山4号 北楯	長鈎	横刳	鋲留	5.6	11.0	8.4	3+3(2+2)					
	伝・六野原古墳群	長鈎	横刳	鋲留	欠	13.0	9.2	1+2				甲冑組み合わせ不明	
	大寺山	鈎	横刳	鋲留	欠	欠	欠	欠					
	円照寺墓山1号 5号短甲	鈎	横刳	鋲留	5.0	10.3	欠	2+2				甲冑組み合わせ不明	
	三珠大塚	鈎	横刳	鋲留	7.5	12.5	8.9	2+3					
	川上	軸	横刳	鋲留	5.7	12.0	9.5	2		横鋲/内3		4z	
	11	金塚	長2	横刳	鋲留	5.0	13.6	9.0	1				
		黒姫山 1号短甲	長2	横刳	鋲留	4.5	12.0	8.5	1+1		横鋲/外		6
黒姫山 12号短甲		長2	横刳	鋲留	欠	欠	9.0	2+2					
セズノ		長2	横刳	鋲留	4.9	11.8	8.2	1+1					
鳥内21号		長2	横刳	鋲留	4.9	11.2	8.4	1		横鋲/上下			
鳥内139号		(長2)	横刳	鋲留				1		横鋲/内2		○	
武具八幡		方4	横刳	鋲留	5.0	欠	欠	2?				甲冑組み合わせ不明	
鳥山2号		方4	横刳	鋲留	7.0	12.5	9.5	1+1					
供養塚		方4	横刳	鋲留	6.0	10.9	7.3	1+1					
後出3号 第1主体		方4	横刳	鋲留	5.6	12.3	9.5	1+1				甲冑組み合わせ不明	
江田船山 2号短甲		方4	横刳	革綴	欠	12.3	8.4	欠				甲冑組み合わせ不明	
小木原1号		方4	横刳	鋲留	6.4	12.0	10.4	1+2		横鋲/内1		6	
三昧塚		方3	横刳	鋲留	5.6	14.2	11.0	2+2					
多田大塚4号		方3	横刳	鋲留	6.0	11.7	9.8	1+2					
伝・岡崎		方3	横刳	鋲留	5.8	12.0	9.5	1+1				甲冑組み合わせ不明	
大垣内		方3	横刳	鋲留	5.4	11.4	11.5	1+1					
馬場代2号		方3	横刳	鋲留	5.8	11.7	10.1	1+2					
伝佐山		方3	横刳	鋲留	6.3	11.8	欠	1+2				甲冑組み合わせ不明	
マロ塚		方3	横刳	鋲留	5.7	11.0	8.0	1+2				甲冑組み合わせ不明	
江田船山 1号短甲		方3	横刳	鋲留	4.3	12.3	9.4	1				甲冑組み合わせ不明	
西都原4号 1号短甲	方3	横刳	鋲留	6.6	11.3	9.0	1+2						
鳥内81号	方3	横刳	鋲留	5.9	11.4	9.4	1+1						
石ノ形	長鈎	横刳	鋲留	5.1	12.0	8.6	1+2						
真浄寺2号 1号短甲	鈎	横刳	鋲留	6.3	12.7	9.6	1+1						
小田茶臼塚	鈎	横刳	鋲留	6.0	11.8	9.6	2+2		横鋲/外		6b		
安黒御山5号	長2	横刳	鋲留	5.0	11.0	9.0	欠						
高丸10号	長2	横刳	鋲留	4.0	11.0	8.2	1+1						
12	中原	方4	横刳	鋲留				3+3					
扇森山	方4	横刳	鋲留	6.0	12.8	11.0	1+1						
大谷	軸	横刳	鋲留	5.2	13.6	8.9	2+2						

【凡例】

開閉構造・蝶番金具 = 胴一：胴一連、長1：長方形1鋲、長2：長方形2鋲、方4：方形4鋲、方3：方形3鋲、長鈎：長鈎壺、鈎：鈎壺、軸・軸筒、()は蝶番金具を欠くもの、(金)は金銅装、(特)は特殊形態、長2+方4は前胴側長方形2鋲で後胴側方形4鋲。

地板形式 = 堅刳：堅刳板、方形：方形板、長方：長方形板、三角：三角板、横刳：横刳板併用、変形：変形板、(襟)：襟付短甲、(多)：8段以上の多段構成。

衝角付冑 = 地板形式・連接技法 / 衝角底板連接技法を示す【川畑2015】。三：三角板、竪A：堅刳板A系統、小：小札、横：横刳板、革：革綴、鋲：鋲留。横：横接式、上1：上接1式、上2：上接2式、上3：上接3式、上下：上下接式、上内：上内接式、内1：内接1式、内2：内接2式、内3：内接3式、外：外接式、一連：一連式。

肩庇付冑 = 庇部文様を示す【川畑2015】。無A：無透系A類、無B：無透系B類、葉A：葉文系A類、葉B：葉文系B類、三A：三角文系A類、三B：三角文系B類、三C：三角文系C類、レA：レズ文系A類、レB：レズ文系B類、三A1などの数字はA1類であることを示す。

頸甲 = 型式を示す【川畑2016】。小札：小札頸甲。一：襟付短甲のため頸甲付属せず。

短甲の空欄は数値等不明なもの、衝角付冑、肩庇付冑、頸甲ともに○は存在するが型式細分が不明なもの。革綴短甲の竪上板・押付板・裾板幅は未集計。

【分布図(第5図)について】

第5図の分布図では、上記一覽表に加えて野焼2号(方形4鋲)、豊富大塚(長方形2鋲)、大室196号(方形4鋲)、塚原11号(長方形2鋲)、高松3号(長鈎壺)、松江塚山(長方形2鋲)、法連40号(方形4鋲)、田浦出土(方形4鋲)、塚堂2号石室(方形4鋲)、カミノハナ3号(長方形2鋲)、成川(方形4鋲)、福泉洞112号(方形4鋲)、蓮洞山8号(長鈎壺)、伝運洞山(長鈎壺)、竹林里Ⅱ-10号(長方形2鋲)、道林里3号(長方形2鋲)を提示している。

The Systems of Production, Distribution and Reception of Armor in the Kofun Period

by

KAWAHATA Jun

It has been thought that almost all of the iron armor (cuirasses, pauldrons and helmets) produced during the Kofun period, which spans the 350 years from the middle of 3rd century to the end of the 6th century, was exclusively manufactured and distributed by the Yamato government and this played an important social role in reinforcing the power of the Yamato regime. I make clear in this article that in the early stage of the manufacture of iron plate armor in the Japanese archipelago (from 4th century to the early in the 5th century), the Yamato government made and distributed iron armor monopolistically to distinguish statuses among the elites, but in the later stage of the manufacture of iron plate armor (from the middle 5th century to the end of 5th century) several groups produced and distributed armor for their own interests. With the formation of the systems in which several groups made and distributed iron armor for their own purposes iron armor gradually lost its earlier social role, and in the 6th century its role in distinguishing social statuses among the elites disappeared.

First, I elucidate the changes in iron plate armor based on a typological analysis and establish 5 phases. On the basis of the typological analysis, it is clear that there were several systems of production for iron cuirasses during phase 4 and phase 5. Second, by considering the size of the parts and the number of rivets used in one cuirass from each production system, I clarify that in the early stage of manufacturing the cuirasses production in these systems was similar in each, but gradually individual characteristic of each production system appeared and they finally grew different from one another. Third, considering the distribution of armor from each production system, I reveal that although armor from each production system has been excavated from throughout the main areas controlled by the Yamato government and southern part of Korean peninsula, armor from a particular production system is often discovered in one specific region. This indicates that the production and distribution of iron armor was carried out on the

basis of a production system. Through this analysis, I reached the conclusion that the difference in production systems of iron armor means that a different workshop produced them, and that the elite groups that operated workshops produced and distributed iron armor for their own purposes.

Based on the above, transitions of iron armor into 5 phases can be summarized in the following manner. Phase 1 (from the early half of 4th century to the late in the 4th century): iron armor was made exclusively and a limited, small number of the elite obtained iron armor and used it as funerary goods their own tumuli. Phase 2 (from the end of 4th century to the beginning of 5th century): a new type of cuirass, called *sankakuban kawatoji tankō*, which signified lower status than the pre-existing type of cuirass known as *chōhōban kawatoji tankō*, appeared, and a status distinction among the elites based on the combination of iron armor (cuirass, pauldron and helmet) began. Phase 3 (early 5th century): the production of *chōhōban kawatoji tankō* ceased, and the combination of cuirass (*sankakuban kawatoji tankō*) and accompanying helmet alone differentiated the elites. Phase 4 (the middle 5th century): several groups independently began to produce and distribute iron armor for their own purposes. Phase 5 (the late 5th century): independent production and distribution systems conducted by several groups were reorganized and the expression of status differences based on different combinations of iron armor also ended.

The independent production and distribution systems conducted by several groups in phases 4 and 5 indicated the preliminary situation in the 6th century when several clans served the Yamato government in various capacities. The results of this research demonstrate trends of the powerful groups that constituted the Yamato government, and they are important in considering this aspect of state formation in Japan.